

25th

国立看護大学校25周年記念誌

2001 ─ 2026



25th

国立看護大学校25周年記念誌 2001 ─ 2026

目次

25周年を迎えて 国立看護大学校長 萱間 真美	3
国立看護大学校25周年に寄せて 国立健康危機管理研究機構理事長 国土 典宏	4
国立看護大学校25周年に寄せて 国立健康危機管理研究機構理事 俣野 哲朗	5
開校25周年を迎えて 国立看護大学校後援会会長 風間 徳昭	6
交流の場である同窓会のさらなる深化を 国立看護大学校同窓会会長 新関 悠	7

■25周年に感謝を込めて

蒼穹会の軌跡 小島 優子	10
附属看護学校から看護大学校へ 佐々木 和子	15
長谷川美佐保様と国立看護大学校のご縁 小島 優子	16

■25周年に寄せて

国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センターより (看護部長) 佐藤 朋子、(卒業生) 石川 結花	20
国立健康危機管理研究機構 国立国府台医療センターより (看護部長) 宮崎 志穂、(卒業生) 山路 尚	21
国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院より (看護部長) 關本 翌子、(卒業生) 小山 友希	22
国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院より (看護部長) 栗原 美穂、(卒業生) 田中 章敬	23
国立研究開発法人 国立循環器病研究センターより (看護部長) 坂口 幸子、(卒業生) 小林 明日香	24
国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター病院より (看護部長) 中村 直子、(卒業生) 浅利 悠子	25
国立研究開発法人 国立成育医療研究センターより (看護部長) 嶋田 せつ子、(卒業生) 古尾谷 侑奈	26
国立研究開発法人 国立長寿医療研究センターより (看護部長) 瀨瀬 伸子、(卒業生) 伊藤 晋作	27
在学生より 上西優妃音、吉橋晃志、野村美花、風間美徳、金子美仁、大木悦子	28
卒業生より 森範子、村上由希子、須永直人、神澤杏和	31
修了生より 馬場洋子、松田謙一	33

■国立看護大学校 概況

看護学部の歴史と教育活動 飯野 京子	36
研究課程部看護学研究科の歴史と教育活動 綿貫 成明	38
研修部の歴史と活動内容 小澤 三枝子	40
国立看護大学校における国際看護学教育 須藤 恭子	42
国立看護大学校25年のあゆみ	44
教職員の状況（令和7年度）	46
航空写真	47

25周年を迎えて



国立看護大学校長 萱間 真美

国立看護大学校は、2026年4月に25周年を迎えました。2001年以来、ご支援いただいております厚生労働省、国立高度専門医療研究センター、大学改革支援・学位授与機構、国立病院機構、地域や海外の実習施設の皆様に心より御礼申し上げます。

2025年度末までに、看護基礎教育では看護学部2,136名（うち助産師養成課程135名）、大学院教育では研究課程部前期（修士）課程171名（専門看護師課程35名）、後期課程（博士）16名が学びました。研修部では現任教育として認定看護師課程371名、臨床実習指導者研修548名、特定行為研修14名が継続教育を受けてきました。

学部1期生は卒業して21年目、多くは43歳前後でしょうか。日本看護協会の調査では看護師長の平均年齢は47歳前後です。臨床実践を積み重ねてきた人たちの中には、中間管理職となっている人もいます。実践での経験に基づいて大学院などで教育を受け、研究・教育職となり、人や研究を育てている人たちもいます。国立健康危機管理研究機構（JIHS）やナショナルセンターの臨床教員として、大学校の教育を支えてくれている人たちもいます。地域医療に活動の場を広げている人たちもいます。2025年秋の同窓会による講演会やホームカミングデーでは、卒業生たちが多彩な活躍を語り、大変嬉しく思いました。

学校の歴史は、教育を受けた・受けている人たちが、コミュニティ（大きいものも、小さいものも）でどんな役割を担い、人としてどのように暮らしているかということによって浮き彫りになると思います。この記念誌では、学んだ方々・共に働く方々から見た大学校の教育を記していただくことをお願いしました。お忙しい毎日の中、様々な想いのこもった原稿をお寄せいただきましたことに、心より感謝いたします。

18歳人口の急激な減少、超高齢社会の中で優秀な看護人材を育てることは、容易なことではないと感じます。看護を目指す人が夢をもってこの職業を選べるか、その夢に現実が応えられているか、何を変える必要があります、変えてはならないものは何かということ、私たちは常に問いながら進む必要があります。その問いが日々の教育を作り、実践や研究への立ち位置を決め、軌跡を残します。その軌跡の集積が、学校の歴史を形作っていくのだと思います。

2025年4月から、国立看護大学校は2020年の新型コロナウイルス感染症パンデミックを受けて設立された、JIHSに所属しております。感染症を含む国民の健康危機に対応する看護人材の育成についても役割を担ってまいります。歴史の上に新しいチャレンジと可能性を積み重ねることが、この時代に集う私たちの役割と考えます。皆の力を合わせて、次の25年に向けて進んでまいります。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

国立看護大学校25周年に寄せて



国立健康危機管理研究機構 理事長 國土 典宏

国立看護大学校25周年、おめでとうございます。

国立看護大学校は、2001（平成13）年の開校以来、臨床、国際協力、研究、教育いずれの分野においても高度な能力を備える看護人材の育成に不断に取り組み、国立高度専門医療研究センターなどに多くの卒業生を送り出してまいりました。

また近年は、学部課程のみならず、研究課程部前期課程（修士相当）・後期課程（博士相当）において政策医療看護学を推進するとともに、特定行為研修や治験コーディネーター（CRC）研修を実施するなど、我が国の政策医療にこれまで以上に貢献するべく取り組んでおります。

私自身は、国立国際医療研究センター時代から9年にわたり本校の活動に関わっておりますが、新型コロナウイルス感染症の蔓延時の医療現場の最前線において、本校の卒業生が使命感を支えに眼前の患者の看護に奮闘していただいたことを非常に誇らしく思っております。また、2024（令和6）年能登半島地震などの災害現場に派遣されて活動される卒業生の姿にも感銘を受けました。そしてこれらはほんの一例であり、卒業生はそれぞれの従事する看護実践の場において、大いにご活躍いただいております。これは、ひとえに、本校の学生、卒業生、修了生の努力と、保護者や関係機関の皆様のお支え、そして歴代の大学校長を始めとする本校関係者のご尽力の賜物であると、深く感謝申し上げます。

2025（令和7）年4月に発足した国立健康危機管理研究機構（JIHS）は、新型コロナウイルス感染症の経験を活かし、感染症その他の疾患に関する調査・研究の実施や医療の提供を通じて安心できる社会の実現に貢献することをミッションとする専門機関であります。そして本校は、その一員として、感染症対策を含めた政策医療を担い、リーダーとなるための知識・技能、人間性を持ち合わせた看護職員を育成することおよび専門性の高い学修と研究を進めることを期待されております。こうした国民の期待に応えるべく、日々の教育・研究活動の充実・発展を通じて、ヒューマンケアを基盤とし、変化する社会の中でますます活躍できる看護人材の育成を目指してまいりましょう。

最後に、開校以来ご尽力いただいた教職員を含め多くの関係者に改めて敬意を表するとともに、大学校に関わる方々の今後のご健勝とご活躍を祈念し、国立看護大学校25周年に寄せる言葉とさせていただきます。

国立看護大学校25周年に寄せて



国立健康危機管理研究機構 理事
(人材育成、国際協力、看護教育担当)

俣野 哲朗

国立看護大学校25周年、おめでとうございます。このたびは、国立健康危機管理研究機構（JIHS）の看護教育を担当しております理事として、また、国立感染症研究所（感染研）の所長として、ひと言メッセージを記させていただきます。

2025（令和7）年4月に発足したJIHSは、世界トップレベルの感染症対策を牽引する「感染症総合サイエンスセンター」として、基礎、臨床、疫学、公衆衛生にわたるすべての領域研究を統合的に推進し、最先端の医療と公衆衛生対策を提供することを目指しております。そのための主要な機能の1つとして人材育成を掲げており、国立看護大学校は重要な役割を担うこととなります。本校は、開校以来、着実に成果を積み重ね、看護に関わる人材を輩出してきましたが、今後、JIHSの一員として益々の発展が期待されている次第です。

この国立看護大学校の活動に感染研も協力して参りました。開校初年度には感染研感染症情報センター長であった岡部信彦先生が、看護学部1年次科目「感染と免疫」および当時は日本に2つしかなかった感染管理認定看護師課程の講義を担当され、その後も研究課程部に開講した感染症看護専門看護師教育課程の感染症サーベイランスに関する講義などの実績がございます。感染研もJIHSの一員として、さらに発展的に看護教育に貢献していきたいと考えております。

2025年度より、私も看護学部4年次科目「感染症看護論」で特別講義を行うようになり、国立看護大学校の充実した看護教育体制を拝見させていただきました。特に感じましたことは、教員の皆様方が本校に誇りをもって教育に取り組まれ、さらなる高みを目指されていることでした。教員が誇りをもって教育に取り組まれることは、学生の成長および大学校の発展に極めて重要と考えております。今後も、本校を卒業したことを誇りに思う次世代の方々が、看護師として活躍するとともに、本校の看護教育にも貢献していただき、看護教育体制が発展していくことを期待しております。

最後に、大学校に関わる方々の今後のご健勝とご活躍を祈念し、国立看護大学校25周年に寄せる言葉とさせていただきます。

開校25周年を迎えて



国立看護大学校後援会 会長 風間 徳昭

国立看護大学校開校25周年、誠におめでとうございます。学生の保護者で構成される後援会を代表して、心よりお祝い申し上げます。

近接する西武池袋線の車窓からは校舎を一瞬しか垣間見ることができず、駅の案内板に表示もない大学校の認知度は、地元住民でさえ高くないかもしれません。わが子に聞いたところ、受験期になるまで存在を知らなかった友人もいたとのこと。しかし、就職活動期を迎えて各地の病院を訪問した娘の話では、病院の方や他大学の学生との会話で、在籍校が“国看”であると話すと非常に高い評価を受け、驚いたと話しておりました。このような評判の高さは、大学校の教育を受けた卒業生・修了生が各方面で活躍している証拠であると思います。先輩方も、中堅職員から幹部職員となる年代に差し掛かると思われます。今後のますますの御活躍を期待しております。

大学校の学生は全国各地から集います。現在は入学時には全員成人年齢に達しているとはいえ、慣れぬ独り暮らしは心細く、時には悩む者もいると思われます。そんな中、教職員の皆様や上級生の方々による温かい御指導が、学生の力になっていることと思います。この場をお借りして、関係する皆様に御礼申し上げます。卒業・修了後はふたたび各地に羽ばたいていく学生ですが、大学校で学んだ知識、技能、そして理念を、社会に広めると共に後輩へと承継して行ってほしいものです。

大学校に隣接する清瀬中央公園に「ここに清瀬病院ありき」と刻まれた石碑があります。昭和初期以降、東京府立清瀬病院をはじめ多くの結核療養病院が建設され、清瀬は「結核関係者の聖地」とも呼ばれることもあるような地域です。その歴史ある清瀬病院跡地に建つ大学校で、看護に関する高度な学習機会を得られるのは、学生にとって貴重な経験となるに違いありません。後援会といたしましても、大学校での学生生活の応援のために、諸事業を推進していきたいと考えております。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

交流の場である同窓会のさらなる深化を



国立看護大学校同窓会 会長 新関 悠

本学は2026年、開校25周年という大きな節目を迎えました。この記念すべき年を迎えることができましたのも、これまで本学の発展を支えてこられた諸先生方、関係者の皆様、そして各分野で活躍されている卒業生1人ひとりのご尽力の賜物であり、同窓会長としてお祝い申し上げます。

私が本学を卒業したのは、東日本大震災の年でした。同窓全員で卒業式に参加することができず、微力ながらも被災地の役に立ちたいとの思いから、有志で募金活動を行ったことを覚えています。在学中は、タイ国情勢不安により国際実習が中止となり、代わりに2週間の国内実習を行うとともに、ユニセフやJICA、世界銀行といった公的機関の視察などの貴重な経験もできました。日々の授業では、グループで海外論文を翻訳して発表、議論しあうワークも行いました。当時はこれらの実習や授業についていくだけでも大変でしたが、いま思うとその苦勞が私のキャリアにおいてかけがえない財産になっていると実感しています。

現在、私は特別区自治体で保健師として従事しています。本学を卒業後11年間、国立国際医療研究センター病院にて看護師として勤務し、その後一念発起して大学院で学び直し保健師の資格を取得しました。様々な分野で活躍している本学の諸先輩方、学友から受けたアドバイスや刺激、本学で学んだ「政策医療看護学」の知識は今でも、病院看護師とは異なるフィールドで働く私の支えや強みとなっています。そして、大学校で培った論理的思考や多角的な視点、深い洞察力や共感、看護師としても保健師としても実社会の複雑な問題に向き合う際の確かな指針となっています。

私は、開校から一貫して様々な分野で活躍する人材を輩出し続ける本学の卒業生であることを心から誇りに思っています。今後も、日本はもとより国際社会にも広く貢献する人材を輩出し続け、本学がさらなる発展を遂げることを祈念しています。本学の同窓会長として、本学がこれからも生命の尊厳と自由を尊ぶ倫理観を基盤とした専門的看護を実践し社会貢献できる看護職を育成する存在であり続けることを願い、在学生と卒業生との交流の場である同窓会をさらに深化させ、本学の発展の一助となるよう尽力する所存です。

(学部2011年卒業、東京都豊島区健康部健康推進課・保健師)



2024年度国立看護大学校同窓会の集合写真



2025年4月より国立健康危機管理研究機構 国立看護大学校となりました

25周年に感謝を込めて

国立看護大学校25周年を記念し、開校以来本学を支えて頂いた国立国際医療センター附属看護学校同窓会蒼穹会（おおぞらかい）様、長谷川美佐保様とご家族（長谷川清司様、千秋様ご夫妻）に感謝いたします。

2001年4月1日に閉校した3年課程の国立病院／国立療養所附属看護学校

国立国際医療センター病院附属看護学校

国立精神・神経センター国府台病院附属看護学校

国立療養所東京病院附属看護学校

国立療養所久里浜病院附属看護学校

国立甲府病院附属看護学校

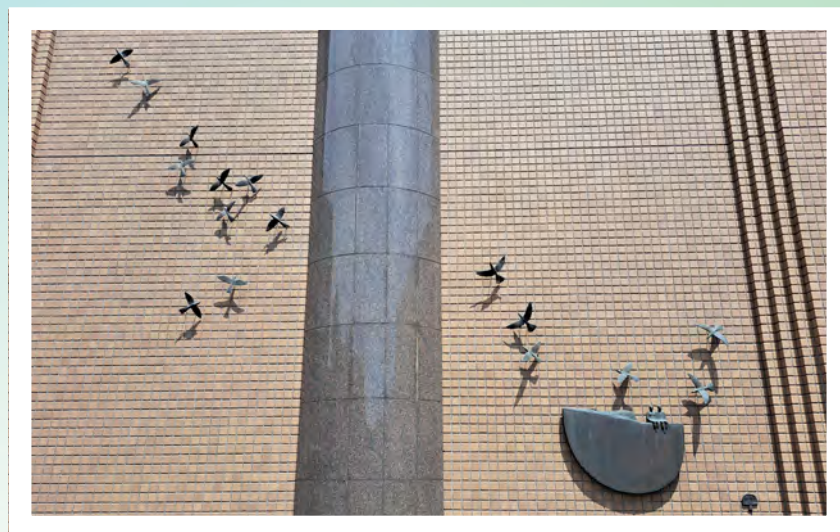
国立東静岡病院附属伊東温泉看護学校

国立大阪南病院附属泉北看護学校

国立療養所南岡山病院附属看護学校

国立南福岡病院附属看護学校

峯田義郎「旅・空へ」



2001年4月9日に開校した国立看護大学校は、国立病院／国立療養所附属看護学校が歩んだ戦後看護教育の歴史を継承し、高度な臨床実践と教育現場のユニフィケーション（一体化）を行って参りました。さらに新たな時代に、グローバルな健康危機管理に対応した看護人材育成へと飛翔を遂げていきます。



倫理学教授 小島 優子

占領下の看護教育

GHQグレイス・オルト看護課長による 国立東京第一病院附属高等看護学院整備の要求

現在の国立国際医療センター（東京都新宿区戸山）は、戦時中は臨時東京第一陸軍病院という名称でした。終戦後は厚生省に移管されて国立東京第一病院となり、1945年10月から看護教育が行われました。1946年3月には2年課程として認可され、同年6月に連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）公衆衛生福祉部看護課長グレイス・E・オルト（Grace Elizabeth Alt、1905-1978）少佐による講演「看護婦とデモクラシー精神」が講堂で行われました。

1947年7月に公布された保健婦助産婦看護婦令に基づいて17の看護婦養成所が設置され、そのうちの1つである国立東京第一病院看護婦養成所に1期生が9月に入学しました。入学当時はまだ教科書がなく、厚生省医務局からは『看護学雑誌』の「看護講座」を使用するように通達されました。

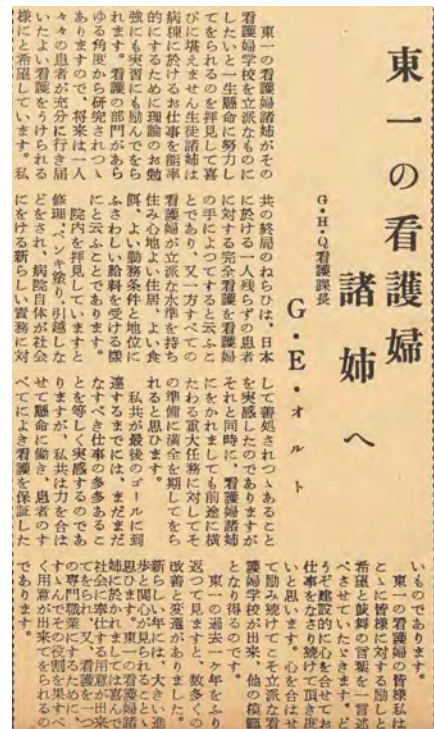
GHQは、日本の病院および看護婦養成施設の視察を行い、1947年7月に近代的な病院管理の立場から、入院患者への家族付添の廃止などの改善を厚生省に要求しました。

そこで、1947年10月に国立東京第一病院はモデル病院に指定され、国立病院の中心的指導的存在として整備されることとなり、病院管理や看護部などの再編成が行われ、オルト少佐は国立東京第一病院附属高等看護学院の整備を要求しました¹⁾。

第二次世界大戦後、占領下日本の看護教育はGHQの指導によりアメリカをモデルとした看護学が取り入れられました。従来日本では、看護婦は医師の診療の助手的存在であり、看護の専門性を追求することはありませんでした。これに対して、オルト少佐の提言により、1948年の



オルト少佐



『看護学院新聞』第5号、1950年12月

厚生省看護課の設置などを通じて、看護婦の社会的地位の向上と組織化が行われました。オルト少佐は、1948年公布の保健婦助産婦看護婦法を書き、1949年に国際看護婦協会宛てに日本の看護婦を会員として受け入れてほしいと、文書および信任状を提出し、多くの本を日本語に訳し、さらに新しい本を書きました²⁾。



オルト少佐も参加した学院のクリスマスパーティー(1948年12月23日)

国立東京第一病院附属高等看護学院の モデルスクール指定

1948年5月15日に国立東京第一病院附属高等看護学院が看護教育のモデルスクールに指定され³⁾、GHQ公衆衛生福祉部看護課からビリー・B・ハーター(Billie B. Harter)氏とエレノア・C・カールソン(Elenore C. Carlson)氏が派遣されて看護学院2階の事務室に常駐し、教務主任・古屋かのゑ先生と協力して日本の看護教育の基礎を築きました。



ハーター氏(左)とカールソン氏(右)

ハーター氏は東京第一病院内でまず看護婦長を対象とする講習会を1948年5月から8月まで、基礎看護法と病室管理、看護実習、解剖生理、小児科看護法、看護教育の原理の講義を1日3時間行い、次いで看護婦を対象として講習会を行いました。

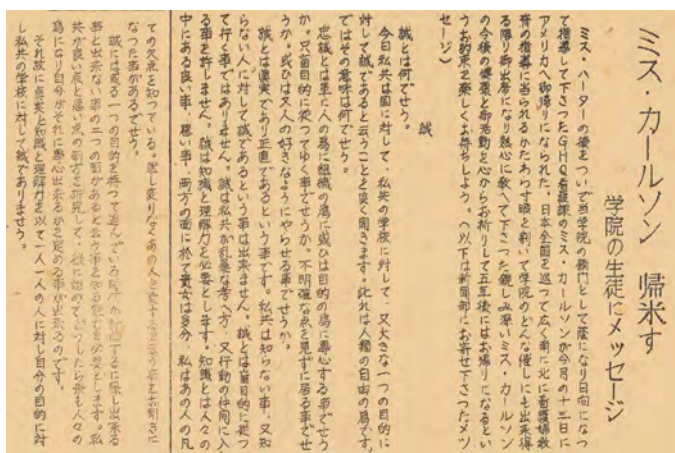


学院最初の戴帽式(1949年9月29日)

そこでは、「患者中心の看護、主体的な看護業務、理論的根拠のある看護」の考え方がしっかりと教えられました。国立看護大学校図書館に所蔵されている古屋かのゑ先生の蔵書印がある『看護実習教本』(東京模範看護教育学



小磯良平「婦人坐像図」



『看護学院新聞』第4号、1950年10月

院編、改造社、1947年)には、「アメリカでは簡単な調査は病院です」などの書き込みがあり、アメリカ式の看護教育が日本に取り入れられてきたことがわかります。

当時は看護婦の独立した業務部門がなく、看護婦は診療各科に属していたので、医長室で医師が診察をしたり休憩したりしているところにお茶を持って行ったり、白衣のボタン付けなどもしていました。このため、カールソン氏たちが「看護婦は医師のメイドではない」と警告しました⁴⁾。国立東京第一病院小児科医で看護学院講師を務めていた今村栄一先生は、次のように記しています。「看護婦は先生にお茶をついだり、タバコを買ってきてやったりすべきではないと、アメリカ人は言った。アメリカ人は看護婦に悪知恵をつけていると不平をいった先生を思い出す。看護婦自身もきびしくやられた。看護婦は看護婦室にはいけない。看護婦はいつも病人のそばにいなればいけない。あなたたちは病人を気持ちよく寝かせるにはどうしているか。苦しみを除くのにどうしているか。毎朝病人の顔を洗ってやっているのか」⁵⁾。

また、病院はGHQの指導により学生の実習場として整備されました。看護学院は戦時中の殺風景なコンクリート造りの陸軍兵舎だったので、「当時は学院の部屋々々のほとんどが物置でマツクラ」⁶⁾であったと古屋かのゑ先生は語っています。そこで、ハーター氏は学生たちのために1949年3月3日に花模様のカーテンをかけた娯楽室をつくり、近代洋画家小磯良平氏による『婦人坐像図』を寄贈しました。娯楽室は自治会の投票により、ハーター氏の愛称から「美理(ミリー)」と命名されました。ハーター氏は、1949年6月に帰国予定でしたので、「ミリー」開室のパーティーはハーター氏の送別会も兼ねて行われました。ハーター氏が帰国後に教鞭をとっていたメソジストホスピタル看護学校と看護学院では、クリスマスにクリスマスカードやプレゼント交換が行われ温かな交流が続きました。

ハーター氏の帰国後も、看護学院の新入生には必ず絵画の由来が話されていました。その後、『婦人坐像図』は修復されて旧校舎の「ミリー」から新校舎1階の「ミリー」へと移転を経て、国立看護大学校へと継承されました。

本学図書館には、ハーター氏から古屋かのゑ教務主任への「親愛なるかのゑへ、心からの応援と成功を祈っていま

国立東京第一病院の皆様へ

ビリー ハーター
(仲田妙子 訳)

国立東京第一病院附属高等看護学院教務の皆様、20周年おめでとうございます。

私がこの手紙の中に入りこみ、皆様がこの封筒を開いた時、私がとび出し大事なこの20周年の祝典をお助け出来たら……と思わずにはいられません。

20年前頃、皆様と共に小さな種子を播くため、夢中で働いたことを決して忘れることはできません。しかし現在は皆様の熱心な指導によって、高くそびえてたくましい樹に成長し、悩める多くの人々に希望と慰めを与えるためにその枝々を拡げていることを私は信じます。

今日まで、そしてこれからも熱心に献身する学生の皆様に私の心からお礼をお送りします。皆様は非常に困難ではありますが、真にやり甲斐のある職業を運ばれたことを決して忘れないで下さい。この職業は知識、技術を得るための勉強と、激しい心身の労働を要求される職業ですが、必ずあなた自身に素晴らしい喜びをもたらします。あなたに託された患者さんを、焦らずにじっくりと看守ってあげて下さい。患者さんの病気は肉体よりも精神に更に深い傷を受けている場合が多いのです。そして真に自分を理解し、みとり護って下さる人を必要としているのです。皆様は必要とされているのです。

御指導下さった病院の先生方、看護婦の皆様、皆様の喜びと値いは、皆様が今まで接して来た多くの学生を通して日本のすみずみにまで及んでいるのです。学生は患者を理解し、その世話をなすにあたり、皆様から親しみをもちて教えていただいたと同様にそれを患者に与えているのです。皆様の毎日のお仕事の上に神の恵み豊かならんことをお祈りしております。どうぞお元気で



国立東京第一病院の皆様へ『いしずえ20周年記念誌』国立東京第一病院附属高等看護学院、1967年



国立東京第一病院附属高等看護学院から贈られた日本人形とメソジストホスピタル看護学生

す。ビリー・ハーター」とメッセージが記された寄贈書が所蔵されています。古屋かのゑ先生は、ハーター氏のメッセージを継承し、病院と協力しながらWHO、フルブライト、国際看護婦協会交換留学生として、毎年卒業生を海外に送り出して、将来の展望を考えられました。



カールソン氏来日歓迎パーティー
(ミリーにて、1964年)



ハーター氏の蔵書票とメッセージが記された寄贈書

戦後の看護教育 —GHQから受け継いだ看護の精神

■ 古屋かのゑ初代教務主任

古屋かのゑ先生は、1970年までの23年間、看護学院の教務主任を務め、GHQ看護課から受け継いだ「患者中心の看護、主体的な看護業務、理論的根拠のある看護」を日本に根づかせるために尽力しました。教本の「看護倫理」の項の「むすび」に以下のように記しています。

「長い間、看護婦を召使として使いなれて来た古い医師や管理者達の中には、看護婦の制度や業務が確立し、その職業、社会的地位の向上することを喜ばず、むしろ、看護職業の向上を阻み、旧に戻そうと考えるような人も少なくないのである。しかし、また一方に、看護の向上がなくては、医療の向上も公衆衛生の普及向上もあり得ないことを理解力説し、協力している医師や、行政管理者もいる。つまるところ、要は看護婦自身の自覚であり、実績であり、努力であると思う」⁷⁾。

戦後、保健婦助産婦看護婦法が公布され、新しい時代に看護職を専門職として確立するための自覚と努力をうながしているのを読み取ることができます。

■ 大学化へ向けて

蒼穹会は、1954年に設立された国立東京第一病院附属高等看護学院の同窓会の愛称として1993年に決まりました。1994年には、故・古屋かのゑ先生、故・壁島あや子



古屋かのゑ先生



『看護実習教本』に貼付された古屋かのゑ先生の「実習経験」



同窓会設立 (1954年)

先生の多大な寄付により「古屋壁島記念同窓会館」ができ、1995年にはレリーフが飾られました。

2001年1月に国立国際医療センター病院附属看護学校は改組されて同年4月1日に閉校し、4月9日に国立国際医療センターの組織として清瀬市に国立看護大学校が開校しました。蒼穹会は閉校後も存続し、「蒼穹会奨学金」は国立看護大学校の学生も対象とされて、2004年度に新規の貸付が終了するまで奨学金の貸与が行われました。その後、蒼穹会は2023年5月に閉会し、その際に国立看護大学校に4400万円のご寄付をいただきました。蒼穹会からのご寄付をもとにして、コロナ禍で閉鎖されていた国立看護大学校の食堂は再開され、食堂の中には同窓会館にあったレリーフが飾られています。

古屋先生は1967年にすでに「看護婦教育を大学（短大を含む）に……と叫び続けて既に久しい」⁸⁾と記していましたが、大学への改組はその後34年間かかりました。

第2代教務主任で看護学院第1期生の壁島あや子先生も、1972年に「専任教員4名という最低基準で学院運営がなされなければならない現状」を嘆息し、「私達学院の設置体である厚生省でも、国立看護大学の構想があるとかきいているけれども」と記していました。「私は現在の看護教育の諸問題が大学になればすべて、解決されるなどとは思わないが、少くとも教育というスタート・ラインに立って看護教育を見つめていきたいと思う」⁹⁾。

蒼穹会が戦後の看護教育の中で培った主体的な看護の志は、2001年に開校された国立看護大学校の中で、国際的な視野を持ち専門能力を発揮する看護職の使命を担う精神として継承されています。

文献

- 1) 『メディカルセンター』東京メディカルセンター出版部、18号、1955年、35頁参照。
- 2) 『外国人のみた日本の看護』国際看護交流協会、1977年、63頁参照。
- 3) 看護二十年史編集委員会編『看護二十年史』メヂカルフレンド社、1967年、「わが国の看護事情」12頁参照。
- 4) 山本捷子『吉田浪子の歩みと素顔 看護と共に65年』ジェイシーエス出版、1995年、100頁参照。
- 5) 今村栄一『新しい看護をもとめて 看護婦のアメリカ病院研修旅行』医学書院、1968年、26-27頁。
- 6) 『学院新聞』国立東京第一病院附属高等看護学院、第25号、1975年1月9日。
- 7) 『准看護婦教本』メヂカルフレンド社、1956年。
- 8) 『学院新聞』国立東京第一病院附属高等看護学院、第44号、1967年11月11日。
- 9) 『学院新聞』国立東京第一病院附属高等看護学院、第49号、1972年12月23日。

この時点に付って静かに20年を回顧すると、どうもやっぱりかなしく侘しい思いである。学院はいまも淡路の兵舎あとであり、しいて学校の仲間に入れていえば各種学校である。専任職員は教務の3人だけ、3人ではどうしてもやってゆけません。と病院の定員から借りているあとの1人はどんなに優秀であっても教務助手なのである。専任の事務員もなく、120余名の学生寮に専任の舎監もない、この現状は20年間殆んど変らなかつた。知らない人に話してもちよつと信じられそうにない。よくも耐えて来たと思う。しかし……何一つ残すべき功績もなく、何か慚愧にも似た侘しい思いである。

講義にしても実習にしても、学院のしごとは何しろ多くの方々のお世話にならなければやってゆけないのである。学生の臨床実習の時、患者さんの病衣の洗濯をさせることだけはやめて欲しい、とか、患者さんの食器洗いかから学生を解放してほしい、というその願い一つを果すのさえ、それはそれは大変なことであった。下着まで濡れてしまうのでゴムの前掛が欲しいと言った1-2期生頃の学生が、今も思えばいとおしくなる。

古屋かのゑ
『いしずえ20周年記念誌』
国立東京第一病院附属高等看護学院、
1967年



壁島あや子先生



古屋壁島記念同窓会館レリーフ



国立国際医療センター病院附属看護学校跡地（東京都新宿区戸山）

附属看護学校から看護大学校へ



元母性看護学・助産学教授 佐々木 和子

寄稿にあたり手持ち資料および国立看護大学校（以下、大学校）図書館特別展示「戦後の看護教育の変遷——国立看護大学校所蔵の貴重書をたどる」を参考にした。特別展示は見事である。

私は2000年4月国立国際医療センター病院附属看護学校（以下、看護学校）に異動赴任した。同校最後の学生の教育活動、閉校記念誌の作成、記念式典、膨大な歴史的看護教育資料の整理及び大学校への移管作業等が役割であった。同校は大学校の祖となる学校の1つである。関係省庁による同様の閉校学校（複数校あった）への指示は「卒業生の学籍簿電子化作業の推進」のみであり、他の教育諸資料は廃棄というものであった。しかし同校の看護教育資料は、そのままわが国の看護教育の歴史であり廃棄すべきではないというのが共通認識であった。約50年の看護教育資料の整理と精選は簡単な作業ではない。同校卒業生・教員が中心となり、誠実に精力的になされた。しかし、これらの資料をすぐ大学校に移管することは困難であったため、母体病院の地勢に詳しい教員が保管場所を確保し数年間保管できた。大学校が開校し運営が軌道にのった頃、関係者に重要な看護教育資料が保存されていること、ぜひ大学校で保存してほしいことを説明し認めていただいた。こうしてわが国の看護教育の歴史的資料は無事に大学校図書館で永久保存のルートに乗った。

大学校開校にあたり長谷川美佐保様から奨学金として多額のご寄付がなされたと聞く。長谷川様は複数の施設で国立病院看護部長、附属看護学校教務主任を務められた方である。ご寄付時「国立の看護教育の大学化は私達の悲願でしたから開校は本当に嬉しい」と仰っていた。

数年後、在学女子学生が「自分はこの大学で助産教育を受けるのが夢であった。しかし経済的な理由でどうしても無理」と悲しそうに語ったことがある。この後、助産師育成基金が設立された。2023年看護学校同総会である蒼穹会の活動中止に伴い、教育資金のご寄付があったと聞いた。ありがたいことである。＜学びたい者が学べる環境の提供＞は大切である。奨学金充実はその1つであると考える。大学校のさらなる発展を心から願うものである。

長谷川美佐保様と国立看護大学校のご縁



倫理学教授 小島 優子

臨時東京第一陸軍病院（現・国立国際医療センター）で迎えた終戦

長谷川美佐保様は1920年に富山県で生まれ、富山高等女学校を卒業する前から看護婦になることをひとすじに夢見ていました。日本赤十字社群馬支部の甲種救護看護婦養成所を卒業後、日本赤十字社の救護看護婦に任用されて病院船に勤務し、1944年3月に臨時東京第一陸軍病院第九内科病棟に配属されました。その後戦局が悪化したために、10月に入院患者とともに臨時東京第一陸軍病院の箱根分院に疎開しました。1945年8月の終戦とともに招集が解除されると、日本赤十字社群馬支部の救護婦長に任用されて戦後処理を行いました。

清瀬病院附属高等看護学院での看護師養成（1957-1965）

1949年から国立埼玉病院附属高等看護学院教務主任を務めた後、1957年に国立療養所清瀬病院附属高等看護学院の初代教務主任として赴任し、1965年まで務めました。当時、不足する看護婦の確保をはかるために、准看護婦として3年以上の実務経験のある者のために、2年課程の看護婦養成施設（進学コース）が全国に先駆けて清瀬病院に設立されたのでした。

当時の清瀬病院は、現在の国立看護大学校と清瀬市立中央公園のあるところに位置し、バス通りに面した正門（現・東門）側に平屋の白いモルタル造りの管理棟、外来、医局棟がありました。現在のグラウンドに木造2階建ての病棟があり、900人近くの患者さんが入院していました。看護学院の校舎は裏門（現・正門）側の旧本館を利用して発足しました。

学院の母体は単科の療養所であることから、実習を他の総合病院に依頼しなければならず、5・6期生は国立東京第一病院（現・国立国際医療センター）で実習を行いました。また、学院には様々な経歴を持つ学生が一堂に会するため、看護原理などの基礎科目に重点をおいてグループ研究をさせて、討議を取り入れました。こうした学習によって、学生自身もそれまでの看護に対する振り返りがなされると共に、新たな興味を覚えるようになりました。

1962年に国立療養所清瀬病院と国立東京療養所は統合されて国立療養所東京病院として発足し、1970年に清瀬病院は閉鎖され



清瀬の国立療養所東京病院で（1974年）

ました。清瀬病院跡地には中央公園が整備され、国立療養所中野病院、国立武蔵療養所との3病院合同による附属看護学校として大型化された国立療養所東京病院附属看護学校が1982年に新築されました。その後、時代の変遷と社会の要請から、2001年4月1日に同看護学校は閉校しました。当時の看護学校の校舎（現・研修棟）と図書食堂棟（現・福利棟）は残され、新築の本館棟と体育棟とともに中庭を囲むかたちで国立看護大学校は設計されました。

国立病院医療センター（現・国立国際医療センター） 看護部長(1974-1979)

1974年4月、国立東京第一病院から改称した国立病院医療センターの総看護婦長に配置換えになりました。当時は病院が新築され、病棟開棟問題で職員団体との折衝に明け暮れました。早晩訪れる高齢化時代に対応するため、1979年4月までに合計8棟の病棟を立ち上げました。

同センターの病院管理・運営と看護学生に対する臨床指導の充実に努めたほか、総看護婦長協議会長、日本看護協会理事として、看護職員の夜勤体制改善のために定員増などについて陳情を行ったりもしました。


1974年5月には、国立病院医療センター附属高等看護学院同窓会に総看護婦長として出席し、職場を離れて数年たった卒業生が職場復帰するための卒後教育についての話を同窓会から受けて、翌年から毎年同窓会会員のために卒後研修の受け入れを行いました。

総看護婦長として1975年3月には、国立病院医療センター看護研究会編集『看護基準 第4版』改訂に携わり、臨床看護はもちろんのこと看護学生の教育にも役立つように配慮しました。『看護基準』は、国立東京第一病院時代に病院内の看護手順を統一して学生指導のために作成され、1957年10月に看護婦に500部配布されました。すると他の病院からも要望があり

おまちしています
医療センター
長谷川綾子看護部長

皆様もすでに、ご存じのこと
と思えますが、国立東京第一病院
は、去る4月15日から国立病院医
療センターと名称が変更しました。
しかし、名実共にセンターとして
の機能を十分に発揮するまでに
いたっておりませんが、近い将来に
病棟部門、研究部門、教育部門の
それぞれ建物、設備、陣容等が整
い国立医療センターとしての役割
を果たす日も、そう遠くないこと
と思います。病棟部門は地上16階
地下2階の立派な近代的な建物
ができて、新しい機械設備が導
入され、看護職員も少しでもいい
看護をするために、研究会やカン
ファレンス等を活発におこなっ
ております。

このたび、同窓会から卒後教育
を計画したいとお話があり、
時間を得たいとお願いしたことと思
いまして、できるだけのご協力を
いたしたいと考えております。卒
業生の方々の中には職場を離れて
数年、あるいはそれ以上経過され
た方もあるかと思いますが、動機
て見たい気持はあるが、職場復帰
をするには、どうも自信が持
てないとおっしゃる方々に、病院は
門戸を開いて研修の場を提供し、
一人でも多くの方を職場にお迎え
したいと思っております。皆様の
ご参加を心からお待ちしてござい
ます。



『同窓会新聞』国立病院医療センター附属高等看護学院同窓会、17号、1975年1月1日

主催者側より
医療センター総婦長
長谷川美佐保

当院は、今年も去る七日に三個
病棟とICUを開棟しまして、現
在入院患者さんは、六百名余り、
外来患者さんは、一日平均大体、
千百名位でございます。看護婦
は三百二十五名で、その中、当院
の卒業生は、五十六名で全体の
一七・二%でございます。去る四月
には、全国から九十名余りの看護
婦を採用しましたが、その中、当
院の卒業生は、十五名でした。

長い間の念願であった看護学校
の校舎と学生寮も近く新築される
ことに決まりました。

卒業生の皆様も新装なった病院
に気軽にお出かけ下さい。また暫
く家庭においでになって、そろそ
ろ職場に出て見たいと思っておら
れる方の研修も喜んで受け入れた
いと思っております。そして折角
の知識や技術を生かしていただい
れば、社会のためにも、また自身
のためにも大変喜ばしいと存じ
ます。

『同窓会新聞』国立病院医療センター附属高等看護学院同窓会、18号、1975年12月1日

出版の依頼があったために、1959年に日本初の『看護基準』第1版が刊行され、看護学生にとっては教室においても実習の場においても手放すことのできない身近な参考指針となったものです。

総看護婦長協議会長としては看護部門の組織の確立に取り組み、1976年5月から厚生省の通達により総看護婦長から看護部長に名称が改められました。

1979年、59歳を迎えるにあたり病院を退職する心境を次のように記しています。

「看護婦になって三十八年、うち公務員として三十二年十カ月を務めました。健康に恵まれ、常に前向きに時代を担う看護師や看護学生のために、休むことなく頑張ってきました。

どうか、これから私と同じ道を歩む人たちも挫けず頑張ってください。きっと良い人生が行く手に待っているはずですよ」（長谷川美佐保『ひとすじの道』2008年、72頁）。

長年にわたり看護師と看護学生のために尽力してきた長谷川様は、このような思いから2002年に国立看護大学校後援会に3000万円を寄付して「長谷川美佐保記念奨学基金」を創設し、2011年に追加で1000万円をご寄付されました。独り暮らしで慎ましい生活をしてきたことからできた貯金を、後進のために役立てるように願われたのでした。この基金からは、長谷川様の2016年のご逝去後も遺志を継いで毎年全学年で16名程度の本学の学生に月額3万円または5万円の奨学金が貸与され、看護への志を持つ後進の育成が続けられています。

ご令弟の長谷川清司様、千秋様ご夫妻は、本学教職員に絶えず心を寄せてくださり、折々に群馬をはじめ、季節の恵みをお届けくださっています。見守られている、応援されていると感じながら働けることに、教職員一同心よりの感謝をお伝えしたいと思います。



国立病院医療センターで（1978年）



国立病院医療センター退官記念パーティー（1979年5月12日）



叙勲伝達式（旧厚生省、1980年4月29日）



勲五等宝冠章の勲記（証書）



勲五等宝冠章の勲章

25周年に寄せて

国立健康危機管理研究機構（JIHS）およびナショナルセンター（NC）の
看護部長・卒業生より

在学生・卒業生・修了生の皆様より

寄せられたメッセージ



「看護の初心に戻る」機会



看護部長 佐藤 朋子

国立看護大学校開校25周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。

国立看護大学校では開校より「心と心が通い合う、人間的な看護」というヒューマンケアの理想を基盤に、国際社会に対応できる人材を育成され、多くの卒業生が貴校での学びを基盤に当院で力を発揮しており、大変心強く感じております。また、臨時実習をされる看護学生の皆さんの看護に向き合う真摯な姿勢に、当院の職員が刺激を受け、「看護の初心に戻る」機会をいただいていると聞いております。振り返りますと、特に、国立看護大学校が同じ組織であることの大きさを実感したのはCOVID-19患者を受け入れた時でした。政策医療の一環としてJIHS・NCで求められる看護実践能力の必要性を学生時代から学び、感染症患者の受け入れは当院のミッションであることを理解している卒業生の方々は、未曾有の感染症に立ち向かう大きな原動力となってくれました。今後も看護基礎教育と臨床現場での連携を強みとした看護職者の育成に国立看護大学校と協働できることを願うばかりです。

未筆ながら、国立看護大学校の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

患者主体の看護を実践することで



学部2012年卒業

副看護師長・認知症看護認定看護師

石川 結花

国立看護大学校開校25周年、心よりお祝い申し上げます。

在学中、私は先生方の深い知識と温かなご指導に支えられ、看護の本質に触れることができました。特に臨地実習で学んだ「常に患者主体の看護実践を行う」という理念は、今も私の看護の根幹を成しています。思い返せば、当時の私は未熟で、基本的な看護技術を実践することで精一杯でした。そんな私に、先生方は、繰り返し問いかけ、患者の立場に立つ看護の大切さに気づかせてくださいました。同時に、患者の生活史や希望を知り看護実践に活かすことで、看護師は患者の人生に寄り添うことができる誇り高い職業であることも学ばせていただきました。真摯に向き合い、導いてくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。そして、共に学び、励まし合える友に出会うことができました。今後も国立看護大学校で培った誇りと使命感を胸に、友とともに、患者主体の看護を実践することで、国立看護大学校に恩返しをしてみたいです。

結びに、25年の歩みを讃え、今後も「心と心が通い合う人間的な看護」を担う看護師を育成し続ける国立看護大学校のさらなる発展を心から願っております。

桜の樹とともに育まれた25年の歴史



看護部長 宮崎 志穂

開校25周年、誠におめでとうございます。

私は、貴校が開校された当時は国立国際医療センター（現：JIHS国立国際医療センター）で副看護師長を務めておりました。開校準備の一環として、国立国際医療センターと国立がんセンター中央病院の共催による実習指導者講習会が開催されることとなり、私もその第1回講習会に参加させていただきましたことを、今でも懐かしく思い出します。

その後も、採用試験や就職説明会などで幾度となく清瀬の地を訪れる機会がございました。2025年4月の入学式に参列いたしました折、学内に植えられた桜の木が年月を重ね、たいへん立派に成長している姿を拝見し、25年という歳月の重みと、貴校が歩んでこられた歴史を改めて深く感じることができました。

医療の高度化や社会の多様化が進む中で、看護師に求められる役割はますます広がっております。貴校には、これまで築かれてきた確かな基盤の上に、さらに豊かな教育を発展させ、看護の未来を切り拓き、専門性と人間性を兼ね備えた看護専門職を育てる場として輝き続けることを心より願っております。

学び続ける力を育んだ場所



学部2012年卒業 前期2020年修了

副看護師長 山路 尚

在学中のことを思い返すと、先生方や仲間を支えられた日々があったからこそ、今の自分があると感じます。学部の4年間では、看護の基礎を1つひとつ積み重ね、臨床を経て進学した研究課程部では自分の関心を深めながら学びを広げました。講義や演習で得た知識だけでなく、仲間と意見を交わし、ときに悩みながら過ごした時間は、今の私の看護観を形づくる大切な土台になっています。

卒業後は国立国府台医療センターに勤務し、現場での学びを積み重ねて14年が経ちました。学生時代の実習で、「患者さんに寄り添う」という当たり前のようで難しい姿勢に向き合った経験は、今も揺らぐことのない私の原点です。

臨床で働く中でも、実習指導者講習会をはじめ様々な国立看護大学校主催の研修に参加し、学びを深める機会をいただきました。こうした継続的な学びは、看護師としての成長を支えてくれています。また、同窓会役員として8年間活動し、卒業後も母校とのつながりが続いていることを誇りに思っています。国立看護大学校は、学びの場であると同時に、卒業後も私を支え続けてくれる存在だと実感しています。

開校25周年という節目を迎えた国立看護大学校が、これからも学び続ける文化を大切に、同窓生との絆を深めながら、看護の未来を切り拓いていくことを心から願っています。

国立看護大学校の思い出



看護部長 関本 翌子

開校25周年、誠におめでとうございます。

当院では、数多くの卒業生がさまざまな部署で看護師長、副看護師長、専門看護師、認定看護師などとしても活躍し、しっかりと足跡を残しています。私自身の思い出も交えながら、この歩みを振り返りたいと思います。

1期生を臨床現場で迎えるにあたり、実習指導研修を受講しました。そこで、学生観、教育観、看護観を本気で学び、言語化することの重要性を強く実感しました。実習指導の難しさを感じつつも、実習の最後のカンファレンスで、学生がしっかりとその成長を示した瞬間に大きな喜びを感じたことは、今も心に残っています。

国立看護大学校が2003年に認定看護師教育課程を開講し、専門的な実践・教育を行うためには自分自身が学び続けることが必要だと感じ、2004年にがん性疼痛看護2期生として6か月の研修を受講しました。その講義は目から鱗が落ちるような内容で、演習や実習も充実しており、この経験が私にとって大きな転機となり、その後の道を歩む原動力となりました。

また、国立看護大学校での学びは、私の看護観や人生観を深く形成してくれました。学生を取り巻く環境は日々変化していますが、看護を生業とする仲間として、これからも共に歩いていけることを願っています。

政策医療看護実習後のキラキラした表情



学部2005年卒業

看護師長 小山 友希

国立看護大学校開校25周年、おめでとうございます。

学生時代の印象に残っておりますエピソードとしては、何はさておき、大学校の特徴でもある政策医療看護実習です。この実習ではナショナルセンター（NC）の担う役割やその中で求められる看護師像を学生時代から学べたことが、看護師キャリアの中で考えても、貴重で有益な経験であったと感じています。

2025年度にがんセンター中央病院へ異動となり、初めてがんコースの内容に触れ「こんなに面白い実習をやっていたんだ！」と感動を覚えました。同時に、そういえば同級生達は政策医療看護実習の後は皆キラキラしていたなあと思い出に浸りながら、ふと、今の自分はお預かりしている実習生に同じような表情をもたらすことが求められる立場にあるのだな、と背筋が伸びる思いがいたしました。

このように看護基礎教育のみならず国やNCが必要とする人材育成という視点で、学生を育てる教員の方々のご尽力とご苦勞を思うと尊敬の念を抱いてやみません。私もNCの管理職として、また卒業生として、後輩育成の一助となるよう協力していきたいと考えております。これからもどうぞよろしくお願ひ致します。

頼もしい卒業生達



看護部長 栗原 美穂

私は本学の前身である国立国際医療センター病院附属看護学校の卒業生です。就職後、NCや厚生労働省で勤務する中、開校後初めての実習を受け入れたことを懐かしく思い出します。慣れない環境で一生懸命学び、患者さんに真摯に向き合う学生の姿は、看護師としての原点を再確認させてくれました。また、学生のまっすぐな眼差しは、臨床で働く私にとっても大きな励みでした。

本学の卒業生は、当院でも第1期生から現在まで活躍し、看護師長として組織を牽引する者、大学院で学びを深める者、専門性を発揮するスペシャリストなど、その歩みは頼もしい限りです。

2018年に開催された「国立高度専門医療研究センターの今後の在り方検討会」では、外部有識者を交えた議論を通じ、国の政策をふまえた将来の方向性が示されました。本学の教員とNCのさらなる連携により学生および卒業生の支援に繋げていきたいと思えます。

25周年を迎える本学が、今後も看護の未来を担う人材を育成し続けることを心より期待します。学生の皆さんには、臨床・教育・研究の場で力を発揮し、自らを誇れる看護師を目指してほしいと願っています。

後進の成長を支える存在でありたい



学部2008年卒業

看護師長 田中 章敬

国立看護大学校での学びは、私の看護の原点であり、専門職としての礎です。正直に申し上げれば、当時の私は決して真面目な学生ではなく、学業や実習に対する姿勢も十分とは言えませんでした。しかし、根拠に基づき深く考え、倫理的視点をもって判断する姿勢を問いつけられた日々が、私の未熟さと向き合う機会となり、看護に向き合う覚悟を育ててくれました。その学びは現在、国立がん研究センター東病院で高度ながん医療に携わる中でも揺るぎない支えとなっています。

在学中、仲間と議論を重ね、実習や課題に真摯に向き合った経験は、人としての成長にもつながっています。苦楽を共にした仲間との繋がりは、今も続くかけがえのない財産です。大学卒業生として初めて国立研究開発法人国立がん研究センター東病院の看護師長という重責を担う今、組織と看護の質向上に責任を果たし、後進の成長を支える存在でありたいと強く願っています。

確かな知識と倫理性、主体的に学び続ける姿勢



看護部長 坂口 幸子

国立看護大学校の開校25周年、心よりお祝い申し上げます。

長きにわたり、貴校は国立高度専門医療研究センターにおいてリーダーとして活躍できる看護師を養成し、これまで数多くの優れた卒業生を送り出してこられました。当センターでも卒業生は活躍しており、確かな知識と倫理性、また主体的に学び続ける姿勢はまさに貴校の教育の賜物と感じております。

実習で初めて大学校の学生を拝見した際に、礼儀正しさと病態把握の深さに感心したこと、患者さんに真摯に向かう姿勢や、理論と実践を結び付けようとする意欲を感じたことを記憶しております。また、臨床教員の存在がさらに大学校と病院の連携を強化していることも感じました。

社会の変化と医療の進歩が著しい今、看護の果たすべき役割はますます重要になっています。貴校がこれまで築かれた確かな基盤の上に、次代を担う看護の担い手がさらに育まれることを心より期待しております。

今後の国立看護大学校の一層の発展と教職員、学生の皆さまのご健勝をお祈り申し上げます。

揺るぎない基盤



学部2013年卒業
看護師・特定看護師

小林 明日香

私は国立看護大学校9期生です。現在、国立循環器病研究センターのCCU病棟で特定看護師として、救急外来も担当しています。急性期の重症心疾患患者を対象とする現場では、迅速な判断と高度な技術が求められますが、学生時代に培った根柢・理論に基づく看護やヒューマンケアの精神、そして患者の生活を尊重する看護の姿勢は、現在の私の看護観における揺るぎない基盤となっています。学生時代、つらい時には仲間と切磋琢磨しながら、専門性の高い様々な病院で臨地実習を行い、現場の看護を肌で感じながら学べたこと、患者家族の生活背景を丁寧に把握し、単なる処置や技術ではなく、患者の人生に寄り添う看護の本質を理解できた経験は、現在の実践においても大きな力となっています。また、先生方との対話を通じて、看護を探究する姿勢を育んだことも忘れられません。

今後も国立看護大学校の卒業生が、全国、そして世界のあらゆる分野で活躍していくことを心から楽しみにしています。母校がさらに発展し、看護の未来を切り拓いていくことを、卒業生の1人として応援しております。

祈りの彼方へ



看護部長 中村 直子

開校25周年、おめでとうございます。「25年も経つのか」と感じます。国立看護大学校の設立は、我が母校（国立病院医療センター附属看護学校）の閉校でもありました。当時、真新しい校舎を見学し、少し寂しいような、うらやましい気持ちとともに、ナショナルセンターに新しい風が吹き込む希望にあふれた予感がしました。

ナショナルセンターに勤めてからは、入学式や卒業式で清瀬に伺うことがたびたびあります。私は、その時に聞く校歌「祈りの彼方へ」が大好きです。歌うのは難しそうですが、メロディも歌詞も素敵です。自然豊かな清瀬の地で、看護の道を志した若者が、仲間とともに、心身を磨かれ、人をケアする難しさややりがいを感じながら成長する様子が表わされ、耳にするたびに心が温かくなり、初心を取り戻すことができます。

実際に、国立看護大学校の卒業生は、人の命の輝きを信じ、人の命の営みを支える知識と技とマインドを兼ね備えた方が多いです。

これからも末永く、ヒューマンケアの灯を掲げ、志高く看護の道を進む学生を育ててほしいです。私も学生実習の受け入れや卒業生と働く中で、共に「祈りの彼方へ」歩んでいきたいと思えます。

大学校でのさまざまな思い出



学部2007年卒業

副看護師長 浅利 悠子

この度は、国立看護大学校が開校25周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。大学校の門をたたいてから23年が経つということに驚くとともに、時間の速さを実感せざるを得ません。入学式の日、東門をくぐると桜が満開で、校舎までの道のりを不安と期待を抱きながら歩いたことが克明に思い出されます。

入学して早々に開始された看護基礎理論は、ブーン先生による英語での授業でした。看護を英語で学ぶ体験は、貴重かつハードなスタートだったと思返されます。大学校での思い出は…

- ・ 野尻湖で野外生活。「キャンディ」なるブルーシートに包まれてひと晩を過ごす（断念！）
- ・ 初めての臨地実習、10階の病棟までの階段を猛スピードで歩く臨床教員の後を息切れしながら追いかける
- ・ 3年後期の領域別実習、4年前期の政策実習で看護の楽しさを実感
- ・ 4年前期の国際看護学実習、タイでの2週間学びも遊びも満喫
- ・ 卒業研究、9か月かけて論文作成、提出ギリギリ！ 4階から1階の事務室まで猛ダッシュ

…書き足りませんが、良い時を過ごしたのだと実感します。卒後に臨床教員として大学校に戻ったことも感慨深いです。

末筆ながら、今後ますますの国立看護大学校のご発展をお祈りいたします。

誠実と凜然を育む学風



看護部長 嶋田 せつ子

国立看護大学校が25周年を迎えられましたことに、謹んでお祝い申し上げます。永年にわたり看護教育の発展に多大なるご尽力を重ねてこられた萱間学校長をはじめ、教職員ならびに関係者の皆さまに、謹んで敬意を表します。

私は毎年、夏に講義で国立看護大学校（以下、大学校）へ伺うことを楽しみにしております。静かで広大な敷地に大きなランニングトラック、そして真夏の陽光と清々しい緑は、いつ訪れても若さと可能性に満ちたエネルギーを感じさせてくれる特別な時間です。このような恵まれた環境で学ぶ学生の皆さんを、羨ましく思いながら校内を歩いた光景を今も思い出します。

例年、当院に就職する大学校の卒業生は約10%前後であり、他大学の卒業生とともに活躍しています。その1人ひとりの立ち居振る舞いや患者さんとの向き合い方を見ていると、自然とその学校が持つ雰囲気や学風が滲み出ているように感じられます。大学校の卒業生は、誠実さと凛とした姿勢を備えており、どこか教員の先生方の佇まいを思わせる一面も見受けられます。

25周年という節目を迎えられた大学校が、今後も看護の未来を担う多くの優れた人材を輩出されますことを、心よりお祈り申し上げます。

同級生とともに過ごした日々



学部2006年卒業 前期2015年修了

看護師長・小児看護専門看護師

古尾谷 侑奈

国立看護大学校25周年を心よりお祝い申し上げます。

本学には2期生として入学しました。新しい校舎で、全国各地から集った同級生とともに過ごした日々は、今も心に温かく残っています。豊富な知識と臨床経験をあわせ持つ先生方からご指導いただいた時間の尊さは、看護師として経験を重ねるほど、より深く実感されます。英語で看護理論を学ぶことは当時の自分には容易ではありませんでしたが、その挑戦も含めて本学ならではの学びとして今では良い思い出です。

特に印象に残っているのは、各ナショナルセンターおよびタイでの実習です。自分が目指す看護師像について同級生と語り合い、青年期ならではの課題と向き合った時間でした。臨床経験を経て研究課程部生として再び学んだ期間には、実践を理論と結びつけて振り返ることで貴重な学びを得ることができました。

これまで本学を支えてこられた先生方、職員の皆様、そしてともに学んだ同級生への感謝とともに、今後も本学がナショナルセンターで活躍する看護師を育成する拠点として歩み続けることを心より期待しています。

かつての「新人」の成長と活躍



看護部長 瀬瀬 伸子

国立看護大学校が25周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

私が当院に赴任して看護師長として勤務していた当時、初めて看護大学校の卒業生を受け入れました。まだ大学卒の看護師が少なかった時代に、遠方から当院を選び就職してくれたことを非常に頼もしく感じ「大切に育てていこう」と強く思ったことを今も鮮明に覚えています。

それから15年の時を経て、再び当院で働く機会をいただいた現在、かつて新人として現場に立っていた卒業生の皆さんが、看護師長として組織を支え、また大学の教員として活躍されている姿に接し、深く感慨を覚えました。その成長と活躍は、個人の努力はもちろんのこと、看護大学校が一貫して大切にされてきた教育の成果であると感じています。その歩みの一端に関わられたことを誇りに思うとともに、実習や就職を通して生まれたご縁が今もなお当院の看護を支えて下さっていることに感謝の気持ちで一杯です。今後も国立看護大学校で培われた力を発揮し、政策医療に貢献できる人材がさらに育成されていくことを大いに期待しております。

最後に、国立看護大学校のさらなるご発展と、在学生・卒業生の皆様の益々のご活躍を心より祈念いたします。

看護の土台となった「気づき」を次世代につなぐ



学部2008年卒業

教育担当副師長・臨床教員

伊藤 晋作

国立看護大学校の開校25周年を、卒業生として心よりお祝い申し上げます。このたび本記念誌に寄稿する機会をいただき、大きな喜びとともに、本学での懐かしい思い出がよみがえってきました。

新たな一歩への期待と不安の中、国立看護大学校の校門を初めてくぐった日のことを、今でも不思議なほど鮮明に覚えています。在学中、とりわけ印象に残っているのは実習での指導場面です。先生方は学生の小さな「気づき」を丁寧に拾い上げ、優しく寄り添いながら関わってくださいました。その気づきを大切に、学生1人ひとりの思考過程を尊重する姿勢から、看護を自分の言葉で考えることの大切さを学びました。

卒業から18年が経ち、臨床・教育・管理と異なる立場で看護に携わる中で、本学で得た学びが、現在の看護実践の揺るぎない土台となっていることをより一層実感しています。現在は臨床教員として、学生が自ら考え、学びを深められるよう寄り添う立場にあります。看護師としての歩みを国立看護大学校から始められて良かったと、学生自身が感じられるよう、かつて私が受け取った学びを次の世代へつないでいきたいと考えています。

25周年を迎えた母校のさらなる発展と、後輩の皆さんのご活躍を心より願っております。

大学校では、楽しみなことばかり



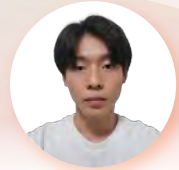
看護学部1年 上西 優妃音

私は、高度専門医療研究センターでの実習の機会があり、国際看護が大きく掲げられている点に魅力を感じ、本学に入学しました。

1年生では、人体についての基礎的な知識や看護技術はもちろん、人間関係や心理、他の国々における文化をはじめとした周辺知識や教養についても広く学ばせていただいています。また、多職種連携演習においては他大学の学生と交流しながら学びを深めることができ、基礎看護学実習ではそれまで自分が勉強して練習してきたことを実践することができました。大学生になってから初めてのことが多くあり、慣れるまでに時間がかかりましたが、授業や講義を通じてたくさんの知識や思考力を高めることができました。さらに、演習や実習の機会を通してさまざまな能力を成長させることができたこと、今、実感しています。

大学校では学習以外の面でも充実した生活を送っていて、新たな友人も増えました。看護師になるという同じ目標をもつ友人たちと語り合い、協力する時間はとても貴重なものとなっています。これからの大学校での学習や生活は楽しみなことばかりで、将来についてはまだ考えが固まっていないものの、興味のある分野を模索していきたいと考えています。

テニスコート整備の体験を通して



看護学部2年 吉橋 晃志

この度は、国立看護大学校25周年記念誌が発行されますことを、心よりお祝い申し上げます。

1年時の2024年夏、私を含め男子学生でテニスコートの整備を行いました。私自身、中学・高校とテニスをしており、大学でも続けたいと思い、期末試験終了と同時に整備を開始しました。コロナ禍の影響で活動が途絶えていた当時のコートは、苔や雑草が生い茂り、「サーフェス」の種類すら判別できない状態でした。

夏休み期間中に日程を決めて学校に集まり、炎天下の作業中には「看護学生のやる作業じゃないだろ」と冗談を交えながら、整備作業を進めた3か月間。自分たちの手によりテニスができる状態にすることができました。2025年度からは少人数ですが、サークルの活動も再開させることができます。

入学直後のこの活動を通し、男子学生同士の強い横のつながりが得られただけでなく、目標に対して思い切ってアクションを起こすことの大事さを感じました。この経験を、今後の看護の学びにも生かしていきたいと考えています。最後に、この活動を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。



より良い清秋祭を目指して



看護学部3年 野村 美花

開校25周年、誠におめでとうございます。この記念すべき節目の年を、在校生として迎えることができ大変光栄です。

国立看護大学校で3年間過ごした中で、私の胸に最も深く刻まれているのは「清秋祭」です。私は広報部長として、数年ぶりとなる協賛活動の再開に力を尽くしました。以前を知る先輩がおらず、まさに手探りの状況でしたが、仲間と支え合い試行錯誤した日々は、今では私にとってかけがえのない財産です。

より良い清秋祭を目指し、模索する中で生まれた学年の団結力、そして組織を動かす上で学んだ報告・連絡・相談の重要性や協調性は、現在私たちが取り組んでいる領域別実習においても、チーム医療や多職種連携の基盤として確かに活かされています。

先生方や友人という温かい人間関係に支えられ、看護の道を歩めることに深く感謝いたします。国立看護大学校で育んだ絆と学びを看護師としての原点とし、残りの学生生活、そして国家試験という壁を乗り越え、立派な看護師として社会に貢献できるよう精進してまいります。

最後に、国立看護大学校の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

食堂「山茶花」という名前



看護学部4年 風間 美徳

国立看護大学校開校25周年、誠におめでとうございます。この記念すべき節目に、学食の命名という形で本校の歴史にその名を刻めたことを光栄に思います。

食堂の名前が公募された際、私は「山茶花^{きざんか}」という名を提案しました。清瀬市の花である山茶花は、昭和48年の制定以来、長く市民に親しまれてきました。その花言葉には「困難に打ち勝つ」「ひたむきさ」という言葉があります。

振り返れば、私たちの世代は幼少期の東日本大震災や、学生時代のコロナ禍など、多くの困難に直面してきました。当たり前だった日常が失われる中で、私たちは工夫を凝らし、ひたむきに前を向いて歩んできました。そんな困難な日々を乗り越え、今を生き、未来へと向かおうとする私たちの姿が、寒さに耐えて凛と咲く山茶花の姿に重なりました。そして「食べること」は、困難に立ち向かう力の源です。この食堂が学生たちの活力の拠点となるよう願いを込めました。

今後、食堂は隣接する公園とも繋がり、市民の皆様も利用できる場所になると伺っています。清瀬の地で愛される山茶花の花のように、この食堂が学生と地域を結び、いつまでも温かく愛される場所であり続けることを願っております。

臨床の先にある進学する意義



学部2014年卒業

研究課程部前期課程

金子 美仁

この度は、国立看護大学校25周年、誠におめでとうございます。

このような節目に寄稿の機会を頂けたことは大変ありがたく、学部在籍時からの歩みを改めて振り返る機会となりました。

本学の魅力は、なんといっても学びの環境が整っていることだと感じます。学部在学中は同じ目標を持つ仲間とともに様々なことを乗り越え、充実した4年間を過ごしたことを記憶しています。

卒業後は助産師として臨床に携わり、研究への関心がありながらも、当時は大学院を助産師・保健師等の資格取得の場として捉えていたため、進学の意義を見いだせずにはいました。

現在、ようやく研究の道へとスタートを切り、今もなお素晴らしい先生方が歴史を紡いでおられる本学で再び学べることを、とても幸せに思っています。

臨床で積み重なっていた疑問や葛藤を、過去のケアを振り返りながら言語化し、リサーチクエストとして研究に発展させることや、得られた知見を社会に還元して今後の社会貢献に繋げていくことが、資格取得後に改めて進学する意義だと今は考えています。

経験豊富な先生方、関係各所の皆様とのつながりがある国立看護大学校が今後さらにご発展されることを祈念しています。

すべてが研究活動の支えに



研究課程部後期課程

大木 悦子

国立看護大学校25周年、おめでとうございます。このたび記念誌に寄稿する機会を頂きましたこと、心よりうれしく思います。

私と国立看護大学校のご縁は2017年、ナショナルセンターの看護師として、臨床で収集したデータを分析するために臨床研究センターに通ったところから始まりました。2019年には勤務を続けながら研究課程部生となり、HIV陽性者の生活を支えるための看護支援をテーマに研究活動を行ってきました。当事者の語りを分析していると、新しい気づきに感動することがあります。先生方の辛抱強いご指導のおかげで、私は着実に研究を前に進められていると実感しています。一方、2021年には大学校の臨床教員を併任しました。当時はCOVID-19が猛威を振るっていましたが、所属する病院や専門領域の異なる臨床教員の方々と共同研究に取り組む機会に恵まれ、オンライン上で活発に意見交換できたことは刺激的な経験でした。

大学校の先生方、研究仲間、図書館やデータ解析ソフトなど、すべてが私の研究活動を支えてくれています。研究成果が臨床へ還元され、患者さんがよりよい生活を送れるよう、これからも努力し続けていきたいと思えます。

教職員と1期生が一丸となって



学部2005年卒業

国立がん研究センター中央病院看護部副看護師長・臨床教員

森 範子

はじめて親元から離れ、新しい生活が始まることにわくわくした気持ちや不安、緊張が混じった感情で清瀬を訪れました。あの時から25年が経ち、臨床教員として再び「国看」に携わっていることに驚きと嬉しさを感じています。

大学生活では、慣れない英語の授業にみんなで苦戦しながらもグループワークしたこと、タイ人の先生に「wake up!!」と起こされたことなど、今でも同期と集まればたくさんの笑い話で盛り上がります。実習着を決める際は、講堂でファッションショーを開催し、みんなで投票したこともよい思い出です。大学校祭、戴帽式、卒業式などの行事も教職員と1期生が一丸となつてつくりあげてきたことが、今でも変わらない国看生の日常になっていて、今考えると貴重な経験だったと思います。実習では、寮に泊まりながらみんなでごはんを食べたりお風呂に入ったりと、実習以外の生活も共に過ごし、大変な中でも一緒に乗り越えた同期の存在の大きさとその経験からの自信が今の自分の根幹に流れていると感じます。

時代とともに国看の在り方や学生生活も変化していきますが、私たちが大切にしてきたこと、揺るぎないものがこれからも継承されていくことを願っています。



入試日、ショックを乗り越えて



学部2005年卒業

国立がん研究センター中央病院看護部副看護師長・臨床教員

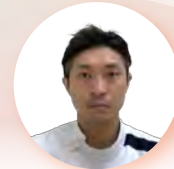
村上 由希子

入試の日は会場にかなり早めに到着した。そして始まる1時間目、確か国語だったと思う。というより、国語しか記憶にない。なにしろ難しかった。センター試験みたいな「顔つき」だったけれど、もっとずっと手ごわかった。まったく手ごたえないまま、試験時間が終わってしまった。気を取り直して以降の科目も受けたが、昼休み後に戻ってこない受験生の席を見たときは、心が折れそうになった。そして、国語ショックよりも、昼に戻ってこなかったライバルよりも、試験を終えて駅に向かう受験生の人波と駅のホームにあふれそうな受験生の数に圧倒され、その日3度目の衝撃を味わってしまった。

続く二次試験は国立国際医療センターの会議室だった。試験会場らしさのない試験会場だったおかげで、リラックスして面接に臨めたと思う。少なくとも、廊下のソファの座り心地を楽しむ余裕はあった。

飯野先生がこの受験のことを折に触れて「すごい倍率だった」とおっしゃる通り、受験生の多さはいまでも覚えている。よく合格したな、と思う。だから私たち1期生はメンタルの強い人が多いのかもしれない。これからも、あの受験を乗り越えた同志として、どうか仲良くしてください。

コロナ禍の学び



学部2011年卒業

国立国際医療センター副看護師長 須永 直人

私は、国立看護大学校にてヒューマンケアに基づく看護、政策医療に関して学びました。そして学生時代の学びを基盤に、国立国際医療センターにて看護実践を積んできました。私の所属する部署では、2020年1月より新型コロナウイルス感染患者の受け入れを始め、現在も様々な感染症患者を受け入れています。

コロナ禍では患者・家族、看護職員の精神的サポート、業務量の増大や煩雑化など多くの問題に直面しました。私自身、副看護師長という立場で看護師長やInfection Control Team(ICT)、多職種と協働しながら、病棟や療養環境の整備、適切な感染対策や重症患者を受け持つための看護職員指導、看護の標準化・患者指導を目的としたクリニカルパス作成などに携わらせていただきました。医療者として、新興感染症への看護を経験したことで、私自身改めて患者・家族、スタッフの人間性を尊重することの大切さを学びました。また、国における危機的状況を経験したことで、組織のミッションをより意識するようにもなりました。

これからも有事に備えて、日ごろから組織横断的に訓練を積んだり、病棟業務の見直しやスタッフ教育にも引き続き携わっていけたらと考えています。

国際看護学実習から現在の実践へ



学部2014年卒業

湘南藤沢徳洲会病院看護部・助産師 神澤 杏和

本学が25周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

2014年に卒業した私にとって、在学中に参加したベトナムでの国際看護学実習は、現在に至るまで看護の実践を支える重要な学びとなっています。

幼少期から英語に触れてきたことに加え、大学での国際看護学実習や在学中の夏休みに参加したインドでのボランティア活動を通して、国際看護への関心は次第に深まりました。ベトナムでの実習では、限られた医療資源の中においても、文化や価値観を尊重しながら母子に寄り添う看護の姿勢の大切さを学びました。言葉が十分に通じない場面においても、相手を理解しようとする姿勢そのものが看護であることを実感した経験でした。

卒業後は助産師として臨床経験を重ね、4年後にはJICAを通じた国際協力にも携わりました。現在も病棟において外国人患者の対応や、国際看護や国際協力に関する活動に関わっています。後輩の皆さんには、本学で得られる国際的視点を大切にして、将来の進路や実践の幅を広げてほしいと願っています。

今につながる、基盤となる学びの時間



前期2017年修了

国立健康危機管理研究機構国際医療協力局

馬場 洋子

開校25周年という記念すべき節目に、筆を執らせていただく機会を頂き、深く感謝申し上げます。

研究課程部前期課程での2年間は、私の人生の中でも物事を深く考えるという意味で、貴重な時間でした。50歳を前にやっとの思いで門を叩きましたが、頭の固さを痛感し、論理構築の難しさに苦しんだ思い出もあります。しかしこの2年間で研究の基礎を教えていただいたことが、現在の仕事の基盤となっています。

私が国立看護大学校で得た最大の財産は、先生方や多くの方々とのネットワークです。共に学んだ仲間との議論の中で、看護師を取り巻く様々な事象における課題の深さも知りました。大変つらい時期も、その都度支えてくださった先生方と、仲間がいたからこそ修了することができました。修了後、私は現在国際的な仕事に携わり、世界各国様々な課題に直面しますが、その専門性としての基盤は、すべて大学校で築かれたものだと実感しています。現場の困難な課題に直面するたびに立ち戻るべき「知の羅針盤」となっています。

この学び舎から、さらに多くの知性が社会に送り出されることを心から願い、母校の益々なご発展を祈念申し上げます。

今も私を支えるかけがえのない財産



前期2015年・後期2021年修了

東京医科大学 医学部 看護学科 准教授

松田 謙一

開校25周年、誠におめでとうございます。

私は研究課程部の前期・後期課程を修了いたしました。前期課程には長期履修生として入学しました。勤務の合間や夜勤明けに登校した日々を懐かしく思い出します。2000名に及ぶ調査票を手作業で集計した経験は、協力者への感謝の念とともに、結果を誠実に示す責任の重さを学ぶ貴重な機会となりました。共に将来を語り合い、学生による自主勉強会を開催するなど切磋琢磨した同級生との出会いは、今も私を支えるかけがえのない財産です。

続く後期課程では、指導教員の綿貫教授の「自律した研究者を育成する」という強い信念のもと研究に向き合いました。思考の浅かった私に対し、先生が幾度となく繰り返してくださった問答は、看護職としての歩みを再考する「ライフコーチ」のような機会でもありました。当時の長寿看護学領域のゼミ生の方々、先生方をはじめ、主査・副査の諸先生方の親身なご助言にも深く感謝しております。

現在は大学教員として教育に携わっております。綿貫教授が身をもって示してくださった「決して学生を見放さず、伴走者であり続ける」という姿勢は、今の私の大きな教育観となっております。

国立看護大学校の今後益々のご発展を心より祈念いたします。



峯田義郎「風の旅」



中庭全景・夜



雪の日の中庭

国立看護大学校

概況





看護学部のあゆみ

- 2001年4月 看護学部看護学科設置
- 2008年4月 教育課程の改正
- 2017年4月 卒業要件を129単位より128単位と変更(国際看護学実習1単位必修)
- 2018年 学部生および卒業生への組織的キャリア支援のためのワーキング設置
- 2019年 卒業生に対するホームカミングプログラム開始
新任臨床教員に対する能力開発FDを開始
- 2020年3月 新型コロナウイルス感染症感染拡大のために卒業式は縮小開催
謝恩会中止(2023年度まで)
- 2020年4月 入学式中止となり、2021年に2学年合同で入学式開催
オンライン授業開始、実習方法の変更(2022年度まで)
国際看護学実習：海外実習中止(2023年度まで)
授業教室の変更：講堂、大講義室、福利棟、研修棟で実施(2023年度まで)
- 2022年4月 教育課程の改正
- 2023年4月 合理的配慮を組織的に取り組むため修学支援委員会設置
- 2024年度 学生食堂再開（名称は公募の結果「山茶花」に）
明治薬科大学、日本社会事業大学との3大学合同授業開始
実習時間を30時間に変更(助産学以外)
入学者選抜方法「指定校制学校推薦型選抜」開始

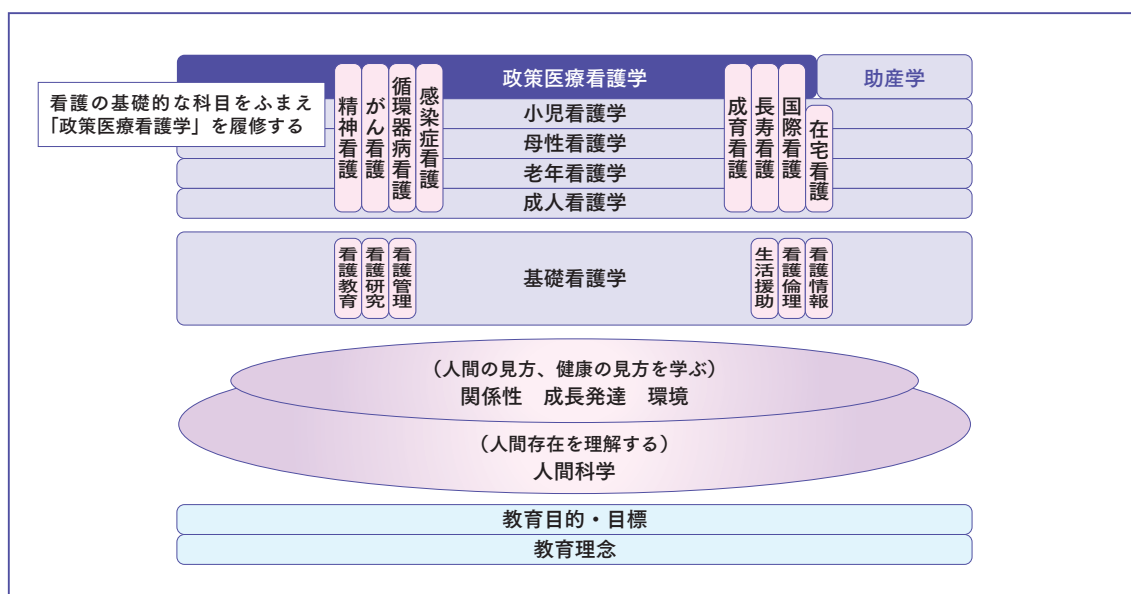
教育課程の特徴および教育の質向上の取り組み

本学の教育課程は、教育理念等に基づき、全人的に人間を理解し、ヒューマンケアへの篤い志に則った、高度な臨床実践能力を有し、国際医療協力に対応でき後進の教育、管理にも対応できる看護職を理想として、その基盤となる能力の育成を目指して構成されている。具体的には、各領域の看護を1～3年次で履修し、3・4年次において国として担う医療である「政策医療」における看護学について学ぶ構成となっている。

看護学部のこれまでのあゆみとして、時代の変化に対応し、教育の質向上および効果的な教育をめざし、カリキュラム改訂や実習時間の変更、修学支援の実施および教員の能力向上のためのFD (Faculty Development)などを継続的に実施してきた。

2020年からの数年間は、新型コロナウイルス感染症感染拡大のためのオンライン授業や実習方法の変更など、臨床と連携しながら厳重な感染予防対策のもと安全に確実な履修となるよう工夫の日々であった。

年々変化する課題に対応しながら、教職員が臨床と連携して教育を展開してきた成果として、卒業生は、開校以来、常に9割程度の学生がJIHSおよびNCに就職している。

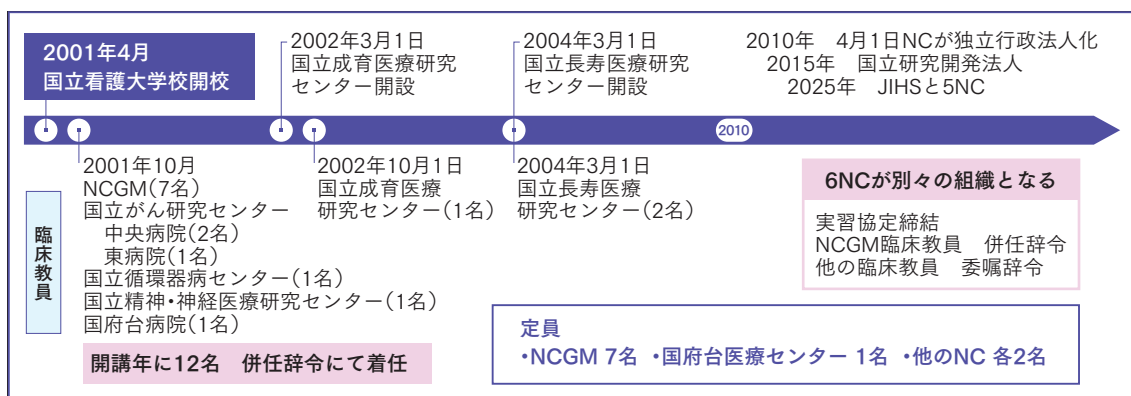


教育課程概念図(看護専門科目の配置)

臨床教員について

本学の教育の特徴は、JIHS/NCと連携した教育の展開であり、特にJIHS/NCの高い実践力のある臨床教員が学内および臨床において教育に関わっていることである。そのことで、高度医療を提供しているJIHS/NCにおいて学生は安心して安全に効果的な実習が可能となっている。

以下の通り、本学開校と共にNC等に臨床教員が措置されてきた。



1期生はNC等の師長や国内外の施設等で活躍し、後輩も多様な場でキャリアを積んでいる。これからは、少子化の流れの中で、看護職を目指す学生の掘り起こし、本学の理念に共感し国立看護大学校において学びたいという者に本学の魅力が伝わるように努力していきたい。



研究課程部の主なあゆみ

国立看護大学校が開校された2001年の4年後、研究課程部が開講を迎えた。主なあゆみは、以下の通りである。

- 2005年4月 研究課程部前期課程（修士課程）を開設
- 2013年4月 前期課程に感染症看護専門看護師教育課程を開設
- 2015年4月 研究課程部後期課程（博士課程）を開設
- 2018年4月 前期課程にがん看護、精神看護、小児看護専門看護師教育課程を開設

2026年3月現在の修了生人数と専門看護師認定審査の合格者数は以下の通りである。

- ・修了生（～2025年度末）
 - 前期課程 172人 後期課程 16人
- ・専門看護師認定審査合格者（個人申請を含む）
 - がん看護 6人 精神看護 7人
 - 小児看護 4人 感染管理看護 23人
 - 合計40人

研究課程部の特徴

社会が劇的に変化していく中、看護職には、多様な立場にある人々のいのち・健康・くらしを守る役割の一端を担うことが求められている。そのため、社会の課題についてその本質を見極める力、柔軟に発想する力、人々の思い・考えやデータを分析し言語化・数値化する力、そして社会に広く発信し政策やシステムの改善につなげていく力、真のリーダーシップが求められている。

本研究課程部を修了する学生に期待される能力・資質について、以下を目指している。

■前期課程（修士課程）

前期課程では、学生が「ヒューマンケア」の精神のもと、効果的・効率的な看護のあり方とエビデンスを探究する政策医療看護学の研究遂行に必要な知識・技術・倫理観等の能力を修得すること、修了後は修得した能力の研鑽と発揮を通して、人々の健康と生活の質向上に貢献することを目指している。

また、高度で専門的な知識・技術・判断力・研究能力を備えた高度実践看護師の養成を目的に、2013年に「感染症看護」の専門看護師教育課程を新設した。その後、2018年には「がん看護」「精神看護」「小児看護」の各専門看護師教育課程を新設した。各専門看護師を目指す学生は、必要な科目を選択履修することで、専門看護師認定審査の受験資格を得ることができ

前期課程開講から各専門看護師教育課程開講までの期間は、受験資格審査を個別受験するための「専門看護師取得プログラム」を提供し、資格取得を希望する学生のニーズに対応した。

■後期課程（博士課程）

後期課程では、前期課程等で培った能力を基盤に、学生が政策医療看護学の発展に寄与する独創的な研究を自立して遂行する能力を修得すること、そしてこの能力を発揮して人々の健康と生活の質向上に貢献することを目指している。

研究課程部における教育・研究の質向上の取り組み

新型コロナウイルス感染症が拡大した数年間は、医療・福祉現場が逼迫する中で、多くの学生がその一翼を担う形で現場に勤務し、医療機関の機能の継続に貢献しながら長期履修期間の延長や休学などを選択し、学業と両立させていった。専門看護師教育課程の学生は、実習機関の状況に応じて単位履修ができるよう調整を図り、実習期間の延期や変更でこの局面に対応した。

本研究課程部では、各学生が臨床実践の場で気づいた臨床疑問を研究疑問として磨き上げるのを支援するようにしている。そのプロセスは、学生も指導教員にも時として険しい道のりとなることもあるが、やりがいも多くある。多くの学生は勤務の傍ら、科目の課題と研究計画やデータ収集、論文執筆等に取り組んでいる。

教員は、各学生の学修・勤務状況とキャリアプランをふまえ、年単位のスパンを見越した研究計画・論文指導を展開するスキルが求められる。本研究課程部の学内審査に加え、独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構における論文の審査・口頭試問に合格することで、「修士（看護学）」・「博士（看護学）」が授与される。12月・1月申請は修了前（1-2月頃）に、3月申請は修了後（6-7月頃）に、それぞれ審査・口頭試問が行われる。

本研究課程部では、学生・修了生の研究論文が同機構の審査に合格できるよう、在学中から修了後も継続的に支援している。変化し続ける社会状況と時代の要請に応じて、学生側の学修スキルの向上、学生相互の学び合い、そして教員側のより効果的な指導スキルの向上も求められている。さらに、教員は研究・研究指導の業績について一層の充実を図るとともに、指導力の高度化を目的とした研修等も継続的に推進している。

研究課程部の今後の展望

本研究課程部の修了生は、国立健康危機管理研究機構・国立高度専門医療研究センター等の職員・管理職をはじめとして、国内外の多様な機関で現在活躍している。本研究課程部では、引き続きグローバルな視点でより一層効果的な学生募集と入試、学修と研究活動の機会を拡充することで健康危機管理および政策医療に関する看護学の発展に寄与していきたいと考える。

研修部の歴史と活動内容



研修部長
看護管理学教授

小澤 三枝子

研修部は国立看護大学校の5つの機能のうちの1つである研修機能を担い、政策医療の専門分野における臨床看護実践能力や臨床看護研究能力、看護管理能力、看護教育の質的向上を図り、政策医療分野の看護において指導的な役割を担うことができる人材を育成することを目的として活動している。

組織統合により国立健康危機管理研究機構（JIHS）になったことを受けて研修内容を一部変化させているが、JIHSおよび国立高度専門医療研究センター（NC）等に勤務する看護師が専門性の高い看護活動ができるよう支援する活動を継続している。

2025年度 開催研修

■ 保健師助産師看護師 実習指導者講習会（厚生労働省認定）

保健師助産師看護師学校養成所指定規則、看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン等において定められている研修で、看護学部の学生が臨地実習を行う各病院には、この講習会を受講した実習指導者を配置することとされている。2001～2014年度は国立国際医療センター看護部、2015年度からは本学研修部の運営で開催されており、2015～2024年度の修了者は500名である。本研修は合計10単位、180時間（30日）の研修であり、2025年度は48名（JIHS4名、NC24名、国立病院機構20名）の看護師が受講した。大学教員44名のうち36名が講義や演習などの役割を担っている。

■ JIHS特定行為研修（厚生労働省指定）

特定行為研修制度は、医師があらかじめ作成した「手順書」に基づき、看護師が患者の状態を見極め、適切なタイミングで特定行為を行う制度である。特定行為は、看護師の実践的な理解力、思考力および判断力、高度かつ専門的な知識・技能が特に必要とされている38の行為で、21区分がある。

JIHS（旧・国立国際医療研究センター）では2020年度から特定行為研修（5区分8行為）が開催されており、5名が修了した。2023年度からは本学研修部が事務局機能を担当、JIHS国立国際医療センターとともに8区分13行為の研修を実施している。修了者は、2023年度2名、2024年度6名。研修は9月から始まる1年間のコースで、2025年度は6名（JIHS 2名、NC 4名）の看護師が受講している。

■ JIHS病院看護師対象研修「治験を知ろう！ 治験における看護師の役割」

JIHSでは「感染症をはじめとする健康危機に対して安心できる社会を実現すること」をミッションとして、感染症臨床研究ネットワーク（iCROWN）事業を推進している。JIHS臨床研究センターおよびJIHS危機管理・運営局企画調整部等とともに、iCROWN登録施設およびNC等の看護師を対象とする研修（1日）を開催し、44名の看護師が受講した。



研修部長（併任期間）
左から、
西岡みどり教授（2011～2012年度）
小澤三枝子教授（2016～2019年度、2023年度～現在）
亀岡智美教授（2020～2022年度）

これまでの活動実績

研修部では、開校初年度の2001年から、国立高度専門医療研究センター等に勤務する看護師等を対象に「政策医療分野の看護研修」「認定看護師教育」「看護研究の研修」「看護教育に関する研修」を行ってきた。

■ 認定看護師教育課程（日本看護協会認定）

認定看護師教育課程（A課程）は、特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて水準の高い看護を実践できる看護師を育成する6か月（615時間）の教育課程である。研修部では、開校初年度から「感染管理」「がん性疼痛看護」「がん化学療法看護」「皮膚・排泄ケア」を順次開設し、2013年度までに認定看護師として計335名が修了した。

また、政策医療分野の看護において指導的な役割を担う看護管理者の継続教育として、認定看護管理者教育課程（セカンドレベル）を開設、計36名が修了した。

認定看護師教育課程（A 課程）		
感染管理	2001～2006、2008～2009、2012開講	修了者163名
がん性疼痛看護	2003～2007開講	修了者77名
がん化学療法看護	2004、2010～2011、2013開講	修了者60名
皮膚・排泄ケア	2007～2009開講	修了者35名
認定看護管理者教育課程		
セカンドレベル	2010、2014開講	修了者36名

■ 短期看護研修

「認定看護師のフォローアップ研修」と共に、「政策医療分野の看護研修」「看護研究の研修」「看護教育に関する研修」を行ってきた。研修ニーズ調査結果等を参考に、タイムリーに最新の情報を取り入れ、専門性の高いテーマで開催した研修はいずれも好評を得ており、この25年間の受講者数は総計8,452名である。以下に、研修名を一部紹介する。

政策医療分野の看護研修：「最新の科学的根拠に基づいた感染防止技術」「循環器（心不全）看護」「精神看護」「がん性疼痛看護」「がん化学療法看護」「重症心身障害児者の看護の課題と解決の方法」「認知症高齢者のアセスメント」など

看護研究の研修：「看護研究」「看護研究論文を読むための統計解析」など

看護教育に関する研修：「PBL」「院内教育Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」など



本学は、開校当初より、「高度先駆的医療看護」と「国際看護」を教育の2本柱として掲げ、わが国の政策医療を担う看護職の養成を使命としてきた。開校時に示された教育目的には、「高度先駆的医療に関わる看護学実践の基礎を修得するとともに、被災等の特殊な状況下においても適切に看護活動を展開し、さらに国際医療協力等において強い使命感と倫理観をもって行動できる能力を身につける」ことが明記されており、国際看護学教育は、こうした教育理念を体現する看護学部教育の特徴の1つとして位置づけられてきた。

国際看護学実習のあゆみ

国際看護学実習は、完成年度にあたる2004年度より、4年次科目として開始された。当初は、タイおよびベトナムの2か国を実施国とし、学生全員が海外で実習を行うという、本学ならではの先駆的な教育方法が採用された。2006～2009年度にかけては、タイの2大学を受け入れ先とし、学生を2グループに分けた実習体制を構築して、継続的に実施してきた。しかし2010年度には、タイ・バンコクにおける政情不安および大規模な抗議活動の発生を受け、安全な実習実施が困難となり、海外実習は中止となった。その後、実施体制の再検討を経て、2011年度にベトナムのハイズオン医療技術大学とMOU（覚書）を締結し、実習を再開した。以降は同大学との協働関係のもと、教育内容および実習体制の充実を図りながら、国際看護学実習を継続的に実施している。

国際看護学実習は、当初4年次必修科目として位置づけられていたが、学生の安全確保および教育の質保証の観点から検討が重ねられ、2017年度以降は選択科目となり、毎年おおむね30名前後の学生が実習に参加している。2020年度以降は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、海外渡航を伴う教育活動が制限され、国際看護学実習も中止を余儀なくされたが、2024年度には再開し、国際看護学教育は継続と発展に向けた新たな段階に入っている。

国際看護学実習の実績と展望

国際看護学実習の教育目的は、開始当初より一貫しており、健康課題および健康格差の実際を理解すると共に、それらが文化、自然環境、政治・経済状況、社会制度、保健医療システムとどのように関連しているかを考察することを重視している。さらに、低中所得国における医療および看護サービス提供の実際を通して、看護実践の在り方を学び、日本の看護職に求められる国際的視点や国際保健政策への理解を深めることを目的としている。

年度	実施国	受け入れ期間	必修／選択	学生数	期間
2004	タイ	ブラパ大学	必修	68	12日
	ベトナム	ベトナム看護協会	必修	21	12日
2005	タイ	セントルイス大学	必修	51	12日
	タイ	ブラパ大学	必修	50	12日
2006	タイ	セントルイス大学	必修	45	12日
	タイ	ブラパ大学	必修	48	12日
2007	タイ	セントルイス大学	必修	51	12日
	タイ	ブラパ大学	必修	52	12日
2008	タイ	セントルイス大学	必修	38	10日
	タイ	ブラパ大学	必修	48	10日
2009	—	—	—	—	—
2010	—	—	—	—	—
2011	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	83	7日
2012	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	95	7日
2013	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	102	7日
2014	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	88	7日
2015	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	99	7日
2016	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	100	7日
2017	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	必修	11	7日
2018	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	選択	43	7日
2019	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	選択	44	7日
2020	—	—	—	—	—
2021	—	—	—	—	—
2022	—	—	—	—	—
2023	—	—	—	—	—
2024	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	選択	31	7日間
2025	ベトナム	ハイズオン医療技術大学	選択	32	7日間

このような特徴的な教育実践を通して、学生は短期間の実習であっても、医療や看護を取り巻く世界の多様性を実感し、日本では得られない学びを得る。またその経験は、将来看護職として国内外の多様な場で活躍していく上での重要な基盤となるものである。2016年度に実施した本学学生を対象とする調査においては、多くの学生が「文化の違いが看護に与える影響を考えることができた」と回答しており、国際看護学実習が学生の視野の拡大および看護観の形成に寄与していることが示されている。

本学における国際看護学教育は、国際医療協力を担う看護職の育成にとどまらず、国内外の多様な健康課題に対応できる看護職の基盤的能力を醸成するものである。25年の歩みの中で培われてきた国際看護学教育は、看護学部教育の柱の1つとして、今後も社会の変化と国際情勢を見据えながら、持続的に発展していくことが求められている。

須藤恭子, 樋口まち子. (2016). 国際看護における実習の意義および教育効果の検討. 国際保健医療, 31(4), 333-345.

国立看護大学校25年のあゆみ

2001	国立看護大学校開校 研修部が設置され認定看護師教育課程「感染管理」開設
2002	『国立看護大学校研究紀要』創刊 研修部認定看護師教育課程「がん性疼痛看護」開設
2003	昭和記念公園で開催された駅伝大会に、学生と講師12人が3チームに分かれ白衣姿で力走しきずなを深めたと報道（読売新聞）
2004	研修部認定看護師教育課程「がん化学療法看護」開設 1期生「国際看護学実習Ⅱ」ベトナム社会主義共和国かタイ王国のいずれかを選択 研究課程部前期課程（修士課程相当）開講
2005	研修部認定看護師教育課程「皮膚・排泄ケア」開設 2期生「国際看護学実習Ⅱ」タイ王国で実施
2006	国立看護大学校同窓会設立
2007	戴帽式廃止
2008	新教育課程を導入。人文社会科学系の選択科目を増やし、基礎医学系科目の配当時間を大幅に増加 清瀬市が「健康」をテーマに市内3大学と連携して市民大学開催
2009	6年間特別講師として学生に透明文字盤の使い方を教えてきたALS患者の高井綾子さんの遺志を受け継ぎ、3人のALS患者が国立看護大学校で開く追悼文字盤教室がNHK「首都圏ニュース」で、報道
2010	独立行政法人国立国際医療研究センター国立看護大学校となる 臨床看護研究推進センター設置
2011	研究課程部「長期履修制度」（修業年限3年または4年）開始 10周年記念感謝状贈呈：長谷川美佐保様、セントルイス看護大学（タイ）、プラパ大学（タイ）、非常勤講師、63実習施設 10周年記念講演会 徳永瑞子先生（上智大学教授）
2012	「国際看護学実習Ⅱ」でハイズオン医療技術大学（ベトナム）の学生と文化交流 ハイズオン医療技術大学（ベトナム）と2校間協定を締結し、「国際看護学実習Ⅱ」で両大学の学生が学習と同時に文化交流
2013	研究課程部前期課程に感染症看護専門看護師教育課程開講 「3大学包括連携協定」を明治薬科大学・日本社会事業大学と締結
2014	「清瀬市と市内3大学との連携に関する協定」締結 きよせ市民まつりで「まちの保健室」として市民健康相談を実施 研究課程部後期課程（博士課程相当）開講
2015	関東学生救急メディカルラリーを国立看護大学校で開催 国立研究開発法人国立国際医療研究センター国立看護大学校となる
2016	「災害時における指定緊急避難場所としての利用に関する協定」を清瀬市と締結 「国際看護学実習Ⅱ」選択科目化
2017	国立国際医療研究センター病院アトリウムでコーラスサークル、手話サークル、ウインドアンサンブルサークルが日本の歌曲「故郷」などお馴染みの名曲をサクソ、クラリネット、フルートに手話コーラスなどの演出も交えてコンサート 日本経済新聞「ひたむき」に、5人の学生が点滴・救命処置・老年看護・トリアージ・沐浴の練習をしている様子が掲載



2001 開校記念式典



2006 最後の戴帽式



2011 長谷川美佐保様に感謝状



2011 10周年記念講演会



2014 3大学包括連携協定式



2014 清瀬市と市内3大学との連携協定式



2014 まちの保健室



2017 NCGMで学生コンサート

2018	研究課程部前期課程にがん看護、精神看護、小児看護専門看護師教育課程開講 学生メディカルラリー2018を国立看護大学校で開催
2019	キャリア支援室を設置し、卒業生の継続的な支援構築体制を整備 「三大学包括連携協定書に基づく三大学図書館相互協力覚書」
2020	清瀬市市政施行50周年記念連携事業「My Kan Sha 50」共催 東京オリンピック・パラリンピック選手村内のPCR検査に本学教職員延べ50名が支援 学生から国立高度専門医療研究センター看護職の方へモザイクアート寄贈 コロナ禍により2023年度までベトナム社会主義共和国での「国際看護学実習II」中止 コロナ禍で年末に帰省できない学生たちのために教員有志によるフードドライブ実施
2021	基礎解剖の授業教材としてVR（仮想現実）を活用した医療教材を導入し、学生がスマートフォンにアプリケーションをダウンロードして使用すると報道（日刊工業新聞） テレビ朝日「スーパーチャンネル」で、緊急事態宣言時は授業が完全オンラインとなったため、ペットボトルとタオルで画面越しに押す練習をしたり、高齢者施設とライブ中継した対策が報道
2022	秋篠宮妃殿下にオンラインで「国立看護大学校20年のあゆみ 現状と課題について」井上智子大校長がご進講 ハサヌディン大学（インドネシア）と交流協定締結し、国際交流室長アンディ・マシタ・イルワン氏講演会「インドネシアの老年看護：現状・課題と将来の展望」開催 東京都と協定締結しグラウンドがドクターヘリのランデブーポイントとして利用される（2025年まで） 清瀬市と市内三大学の連携事業「清瀬アカデミア」で飯野京子看護学部長が「がん直面した時からその人らしさを支える看護」講演
2023	国立看護大学校SNS（instagram、facebook）を開設 東京都消防庁から本学に救急業務の充実発展への貢献に感謝状贈呈 図書館特別展示「女性の歴史を紡ぐーお産の歴史的物品と資料」 山路ふみ子文化財団名画特別上映会『ペコロスの母に会いに行く』、きよせ健幸大学『映画を観て、認知症について考えよう』開催
2024	清瀬子ども大学看護の部「手術後看護師の役割を学ぼう！」開催 「特定行為研修室」を開室し、NCGMを指定研修機関とする特定行為研修を開始 清瀬市内大学合同プログラム（IPE：専門職連携教育）を日本社会事業大学と明治薬科大学と連携して開催 学生食堂が再開し公募により「山茶花」と命名される 東京病院フェスタでダンスサークルがステージイベント開催 「清瀬市立中央公園と国立看護大学校キャンパスの一体整備及び連携・協力に関する協定」締結
2025	国立健康危機管理研究機構国立看護大学校となる 清瀬子ども大学看護の部「赤ちゃんの看護を体験しよう！」開催 図書館特別展示「戦後の看護教育の変遷ー国立看護大学校所蔵の貴重書をたどる」
2026	清瀬市立中央公園と国立看護大学校との境界にあるフェンスが取り払われ自由に往来できる環境が整備される



2018 学生メディカルラリー



2020 モザイクアート



2020 フードドライブ



2022 ドクターヘリ



2023 東京都消防庁感謝状



2024 学生食堂「山茶花」



2024 清瀬市との連携・協力協定

●教職員の状況（令和7年度）

1. 幹部職員

役 職	氏 名
大学校長	萱 間 真 美
事務部長	柳 沢 直 樹
看護学部長	飯 野 京 子
研究課程部長	綿 貫 成 明
研修部長（併）	小 澤 三 枝 子
図書館長（併）	本 間 典 子
臨床看護研究推進センター長（併）	来 生 奈 巳 子

2. 教員

役 職		氏 名		役 職		氏 名			
看護学学科長（併）		矢 富 有 見 子		看護学研究科長（併）		綿 貫 成 明			
役 職	役 職	氏 名	領 域	役 職	氏 名				
人間科学	情報学	准教授	柏 木 公 一	成育看護学	小児看護学	教授	来 生 奈 巳 子（併）		
		助教	田 中 芳 治			准教授	遠 藤 数 江		
	倫理学	教授	小 島 優 子			講師	野 村 智 実		
	語学	講師	スティーブン・ラッセル			母性看護学	教授	池 田 真 弓	
	保健行政学	教授	渡 辺 幹 司				准教授	日 置 智 華 子	
生命科学	教授	本 間 典 子（併）	助教	丸 杉 伊 世 梨					
	助教	櫛 山 櫻	助教	齋 藤 由 加					
基礎看護学	看護基礎科学	教授	矢 富 有 見 子（併）	精神看護学	精神看護学	教授	森 真 喜 子		
		准教授	森 下 純 子			講師	松 浦 佳 代		
		助教	茂 田 玲 子			助教	新 田 真 由 美		
		助教	田 村 里 佳			老年・在宅看護学	老年看護学	教授	綿 貫 成 明（併）
	助教	高 木 香 織（併）	准教授	野 中 千 春					
	看護教育学	教授	亀 岡 智 美	講師	古 川 彩 子				
		助教	高 木 香 織（併）	助教	松 岡 光				
	看護管理学	教授	小 澤 三 枝 子（併）	在宅看護学	在宅看護学			教授	藤 田 淳 子
		准教授	水 野 正 之					助教	遠 藤 直 子
	感染看護学	教授	西 岡 みどり	国際看護学	国際看護学	助教	河 田 美 那 子		
准教授		網 中 真 由 美	教授			須 藤 恭 子			
	准教授	森 那 美 子							
成人看護学	成人看護学	教授	飯 野 京 子（併）						
		教授	杉 山 文 乃						
		准教授	遠 藤 晶 子						
		講師	梅 田 亜 矢						
		講師	清 水 陽 一						
		講師	藤 澤 雄 太						
		助教	長 岡 波 子						

3. 事務職員

役 職	氏 名
総務課長	宮 崎 努
総務係長	高 徳 傳
経理係長	江 田 寛 明
研究業務係長	細 野 小 葵
研究業務係員	日 當 志 遠
学務課長	須 田 英 樹
教務係長	吉 田 真 理 子
教務係員	佐々木 良 介
教務係員	杉 江 紀 久 子
入試係長	本 田 典 良
学生係長	松 本 侑 子
学生係員	山 下 彩 子

● 航空写真



2001年



2026年

国立看護大学校 25 周年記念誌ワーキンググループ
(五十音順)

飯野 京子
萱間 真美
○小島 優子
須田 英樹
高德 傳
新田 真由美
本間 典子
◎森 真喜子
柳沢 直樹
綿貫 成明

(◎：リーダー ○：サブリーダー)

国立看護大学校 25 周年記念誌

発行 2026 年 3 月 25 日 ©

編集 国立看護大学校 25 周年記念誌ワーキンググループ

発行 国立看護大学校

〒 204-8575 東京都清瀬市梅園 1 丁目 2 番 1 号

TEL 042-495-2211 FAX 042-495-2758

制作 看護研究出版

印刷 三美印刷株式会社

本書の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・貸与権・公衆送信権（送信可能化権を含む）は、国立看護大学校が保有します。
本書の無断複写、複製、転載を禁じます。



国立健康危機管理研究機構

国立看護大学校

JAPAN INSTITUTE FOR HEALTH SECURITY
NATIONAL COLLEGE OF NURSING, JAPAN

